
魔法少女リリカルなのはStrikers another とある王家の子孫

火火火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers another とある王家の子孫

【Nコード】

N5431R

【作者名】

火火火

【あらすじ】

「お前は どうして、マイナス思考で、自虐的で、受身で、やる気がないんだ？」

何時だったか自称・最強は僕に言った。その時僕は、

「さあ、僕が死んだ魚のような目だからと思いますよ」

まあ、ウソだが。

「はっ、本当は気づいているくせに」

知っているようだったら聞くな

「そんな自分を変えたいとは思ないわけ」

「別に思いませんよ。嫌になる時はありますが、だから変えようとは思いません」

この会話から数日後、僕は機動六課への転属命令を受けるわけだが、その部隊でまさか、自分がこうなった原因の過去と向き合うことになるとは。

1 話 転属（前書き）

人を疑う事は普通。

1話 転属

「シューマ・ハンメル2等陸士、来年から新設される古代遺物管理部、機動六課への転属を命令する」

そう言われたのは、僕の上司陸士108部隊・部隊長ゲンヤ・ナカジマ三佐で、ここは108部隊の応接室。

「はあ、そうですか。」

とやる気のなさそうな返事をする僕、シューマ・ハンメル14歳、黒髪、黒い瞳であり、中肉中背の体で、死んだような魚の目をしている僕に対して隣に座っている特別捜査官の八神さんは、

「なんや、相変わらずやる気のなさそうな返事のしかたやな、さらに死んだような目だからやる気のなさがパワーアップしてるように見えるで」

「何だどこの野郎！人を見た目で判断するんじゃないやねえ！」

と僕は、言わず。

「そうですね」

「まあ、ええや。この機動六課は主に、ロストログア関連の任務を扱う古代遺物管理部の機動課第六の部隊ってことになった。部隊は前線と後方支援・指揮に大別されとる。シューマ・ハンメル二等陸士には、前線部隊のFWのリーダーを主になってもらおうと思う。さらに、この部隊は独立性の高い少数精鋭の部隊の実験で試験運用

期間は1年や。詳しい説明は、ここにある資料を読んでや。で、何か質問はある？」

そう言いながら、クリップで挟んである紙束（かなり分厚い）を僕に渡してくる八神さん。こんなに分厚いと読む気にならない。

「あー、どうして僕をこの部隊に入れようと思ったんですか？」

この質問は、僕が、六課への転属命令をナカジマ三佐から聞いた時に始めに思ったことである。何故、僕が選ばれたのか、確かに八神さんとは何回か指揮下に付き事件と一緒に担当したこともあるし、自分のスキルを知っているから使いやすいのかもしれない。だけど、僕のランクは、陸戦Bだ。これは別に高くないし、僕よりランクの高い人や経験豊富な人はこの108部隊の中にはいるはず（多分）。それにロストログアを扱う部隊ともなれば、高ランクの魔導師や騎士、レヤスキル保持者などの有能な人材が必要不可欠となる。

「そうやな、私がシューマのスキルを知っていることもあるし、捜査に関してもなかなかいい線だし、戦闘もBランクにしては良いほうや。入れようとした理由はまあ、そんなところや。」

そんなとろって、事はまだ何かありそうだな。

「わかりました。じゃあ、今度会う時は六課の隊舎で」

「よろしく頼むでシューマ二等陸士」

そうして八神さんはソファから立ち、部屋から出て行った。

「さてと来年からお前がいなくなると寂しくなるな」

「別に今すぐ転属じゃあないんですから。これから僕はこの六課の資料を読むので、これで失礼します」

そう言い、僕は部屋から出る。さてと来年から転属するわけだが、新しい仕事場での人間関係を作るのが面倒だなと思いながら、何処で資料を読もうか考えるのであった。

1話 転属（後書き）

まずは、読んでくれてありがとうございます。

どうも火火火です。えーどうでしたか？もし感想があれば書いてくれると嬉しいです。

ちなみに作者名の読み方は火炎^{かえん}です。これはラノベが趣味の方はわかるかも知れませんが、狂乱家族日記の作者である、日日日先生と同じような感じで考えました。どうでもいいと思う読者もいるかもしれませんが、一応書いときました。
ではまた2話のあとがきで

2話 顔合わせ（前書き）

ずっと今日のみでいい。

2話 顔合わせ

僕が六課の隊舎に来てから、自分の部屋で自分の荷物の整理をしていると、ドアが開き、10歳ぐらいの髪が赤い男の子が入って来た。同室の子かな、確か資料では10歳の男の子同室であつたはずと、僕が考えている間にその子は正しい姿勢としっかりした声で、

「今日からこの部屋で一緒になる。エリオ・モンディアル三等陸士であります。よろしくお願いします、シューマ・ハンメル二等陸士」
局員として正しい挨拶だな、僕とは反対だな。

「よろしく、エリオ君。そんなに堅苦しい姿勢やしやべり方じゃないよ。呼び方も名前だけでいいよ。そのほうが僕もFWのリーダーとしてやりやすいし」

「そうですか。では、よろしくお願いします。シューマさん」

「うん、よろしく」

それにしても年上の人に対しては常に敬語なのかこの子は。きっと親は、礼儀正しい人なんだろう。全部ただの予想もといい想像なのだが。

さて、多分エリオ君は、大きめのカバンをもっているから荷物整理だろうからそれが終わったら、もうこの隊舎に来ているであろう、他のFWメンバー（まあ、その内の二名とは知り合いだが）との互いの自己紹介やスキル、コールサインの確認を部隊長挨拶までに済ませておきたい。

「エリオ君、君も僕と同じで、自分の荷物を整理しに来たと思うけど、それが終わったら、他のFWメンバーと一緒に自己紹介とかやりたいんだけどいいかな？」

「わかりました。直ぐに終わらせますので、少し待って下さい」

「別に、今すぐじゃないから自分のペースでいいよ。後、わからない事があつたら聞いて。答えられる事なら答えるから」

「はい」

もし、僕も手伝うからとか言ったら、本当は急いでいるって思われるだろうな。これはただ自分がマイナス思考だから思うことなんだろう。

閑話休題。閑話休題はこんなところで使うものだろうか。文章を書くことが苦手な僕にはよくわからんが。けど使ってみたくなのは、読んだ事がある小説で使われているから。何か漫画や小説、アニメで出た、台詞とか使うと自分がカッコよく見えるからである（まあ、ただの中二病なだけだが）。

今、僕とエリオ君は荷物の整理を終え、他のメンバーに会いに行っている最中でエリオ君が僕に聞いてきた。

「シューマさんは、どうしてこの機動六課に入ろうと思ったんですか？」

「ん、思った？僕は前にいた部隊の部隊長からの命令で来たんだけど。エリオ君も誰かの命令でここに入ったんじゃないの？」

「いえ、違いますよ。僕は、フェイトさんに紹介してもらいました。ここでやっていこう思いました」

あれ、入隊するかどうかで自分で決められるの？だとしたら僕は騙されたのか？まあ、いいか。自分で決めるの好きじゃないし。それにフェイトさんってライトニング隊の隊長のハラOWN執務官か。そういえば、エリオ君一人称が僕と同じだ。どうでもいいが。

「エリオ君、ハラOWN執務官と知り合いなの？」

「知り合いとゆうかその僕の保護責任者なんです」

「はあ！？」

その後は自分がハラOWN執務官とどうやって出会ったのか。自分の不幸や悲しみ、怒りを誰かに知って欲しかったから保護されたあとも暴れていたこと。管理局の保護施設での出来事。それから保護責任者になってくれたこと、優しくしてもらったり、心配もさせた。それがどんなに幸せかを最近わかったことを僕が聞かなくてもその事を話していた。

「本当、自分を知って欲しいから暴れていったなんてバカだったと思います」

僕は、聞こえないように別にくだらない事じゃないだろといった。

「何かいいましたか？」

「いや。にしてハラOWN執務官は、エリオ君にとってとても大切な人なんだね」

その言葉に対して即答で

「はい。」

と答えた。

こんなに嬉しそうに話すのだから多分ハラOWN執務官もエリオ君の事を大切に思っているんだろう。本当に僕と反対だ。僕は、もう大切な人いないし、そんな人は要らない。背負うことも背負われることも嫌いですぐに背負われなくなるし、降ろすから。それに暴れてまでも誰にかに自分を知って欲しいってことは悪い事じゃないと思う。少なくともいろんな事をあきらめている僕よりかは。

そうしているうちに10メートルぐらい先に、ティアナさんとスバルさん（あの2人とは、ギンガさんと一緒にというより、無理やり連れて来られて会ったことがある。）もう1人は、ピンクの髪の女の子がしゃべりながらこっちに歩いてきた。

「あ、ルシエさん。」

ルシエさんってことは、あの子がキャラちゃんか。エリオ君はもう会ったことがあるのか。それからスバルさんたちも気付いたようで

「久しぶり、シューマ。それと初めましてエリオ。」

そう大きな声で言わなくても聞こえるって、相変わらず元気そうだな、スバルさん。僕はそう思い、小さく手をあげて、エリオ君は小さく頭を下げた。これで、全員集合である。

場所は変わって休憩所。

「久しぶりです。ティアナさん、スバルさん。それと初めましてキャラちゃん」

「あ、よろしく願いします」

キャラちゃんは、初対面の僕に、対して少し緊張しているらしい。あ、さっきのスバルさんセリフを真似してしまた。まあ、いいか。誰も気づいてなさそうだし。気づいても多分言わないだろう。それに、突っ込まれるとなんかヤダ。

「アンタ、さっきスバルが言った、セリフをパクったわね。それに、その死んだような魚の目にみえるわ」

この人は、相変わらず人が気にしている事を。

「まあ、ティアもそのくらいにしておこうよ」

まったく、なんて良い人だ。スバルさんは、ティアナさんも少し見習ってほしものだ。

「そうね、どうでもいい事に時間を割くことないしね。じゃあ、これからお互いの簡単な自己紹介、スキルの確認、コールサインを話し合いましょ」

どうでもいい事なら言っな。あれ前も同じ事言っただことあるようなそれよりティアナさんが、リーダーみたいだな。みんな僕が、リーダーだって知ってるのか？まあ、部下に自主的に発言させるのもいいか。そう思いながら話し合いは終わった。

2話 顔合わせ（後書き）

まずは読んでくれて本当にありがとうございます。

えー2話 顔合わせ、どうでしょうか？

どーも火火火（2回目ですが、読み方はかえんです。理由は1話の後書きを見てください。）です。

今回は書くことにあつたて持っている漫画、アニメを見直しました。そうすることで、けっこう気づくことなどがあつてよかったです。

にしても自分が書いている話は他の皆さまと違って短いですね。少しづつ長くできるようにがんばりたいきます。目標は、1話、

四、五千字ぐらです。

では、今回はこのへんであと感想があると本当につれしです。

また次回の後書きで。

3話 訓練（前書き）

善意の大きさは余裕の大きさに比例する。

3話 訓練

僕は、法務担当と広域捜査の主任である、ハラOWN執務官とその補佐官のフィニーノ一等陸士とで、捜査関係の方針について話したいとハラOWN執務官に部隊長挨拶が終わった後に言われた。そうして、通路を歩きながら、方針を話し合っている最中である。

「まあ、捜査する時は、三人の場合はほとんどなく、シャーリかシューマのどちらか一人と私の2人でする場合が多いと思うよ。2人とも捜査以外にも仕事があるしね」

そうなのか。それにしても、ハラOWN執務官、かなり背が高い。何センチあるんだろう。八神さんがしゃべっているときにも背が高い人とは思っていたが、実際に横に立ってみると僕は、ハラOWN執務官の肩までぐらいまでしかない。後、ボン、キュウ、ボンである。あの最強にも劣らない抜群のスタイルだ。これで八神さんと同じ年である。恐ろしい、人体の謎である。

「わかりました。ハラOWN執務官」

「シューマ、私の事べつに名前で、呼んでもいいよ。これから一緒にやっていく仲間なんだから。それにハラOWN執務官じゃあ長いでしょ」

「そうだよ。私もみんなからシャーリと呼ばれてるからそう呼んで」

この部隊の人達は、下の人に名字呼ばれるのが好きじゃないのか、僕もその内の1人だが。にしてもだ。女性が男性に初対面で名前で呼んでもいいといわれたら、あ、この人、俺の事、好きなんじゃね

えと思う人もいるかもしれない。まあ、僕はそんなことは思はないし、もし好きな人なら緊張してしゃべれないと思う。それに僕を好きになる人は、そうとうのバカだ。僕も、年下の子供は名前で、女の子はちゃん付け、男の子には君付けだけど。当たり前だが、僕がこうした呼び方をしているからといって、小さい子供に気があるわけではないが。もしそうだったら僕は、ロリコンでシヨタコンだ。

「そうさてもらいます。フェイトさん、シャーリさん」

「うん。じゃあ私は、はやて部隊長と一緒にへりで本局に行くからここで。それと、なのはのことも名前で呼んだほうがいいよ、シューマ」と、フェイトさんは笑顔で上の階に上がっていた。

「シャーリさん、どうして高町一等空尉のことも名前で呼んだほうがいいって、フェイトさんは言ったんですかね？」

理由はなんとなくわかりそうだけど。間違っているのかもしれないから一様聞いとく。シャーリさんがわかるかどうかは知らないが。

「多分、なのはさんも私やフェイトさんと同じような理由だと思うよ」

やはり、そうなのか。

「それよりシューマは、これからなのはさんとFWメンバーとで訓練だよ」

「そうです」

「じゃあ、その前にシューマのデバイスを貸してくれない。デバイス

スにデータを記録させるためのチップを入れたいから。デバイスは、訓練の時にまた会うからその時に返すから」

「わかりました」

そう言い、僕は腰のホルスターから二本のナイフ（一本は刀子型とじずでもう一本はバタフライナイフ）を取り出し、柄の方を向けてシャーリさんに渡した。

「見たことないヤツだね。これって、アームドデバイス？ AIはあり、なし？ 誰が造ったの？ あ、カートリッジシステムがあるね。」

質問が多いな。それと、デバイスを渡してからこの人、目がキラキラしてないか。

「ええ、アームドで、AIはありません。後、造った人はわかりません。それは貰いものですよ」

「へー、そうなんだ。じゃあ、私はここで」

そう言い、シャーリさんは何処かに行った。さてと。僕も訓練用の服に着替えていくか。

外に出て、海辺の方に歩いて行くと、先になのはさんがいたので走りながら向かって行った。

「遅れてすみません。なのはさん」

罪悪感はないがなんとなく頭を下げた。

「いいよ。シャーリとフェイトちゃんて捜査の事で話してたんでし

よ。それよりさつき、念話でフェイトちゃんから聞いたんだけど。シューマて、上官や年上に対して仰々しく接するようだけど。この部隊の人達には、もう少しフランクにしてほしいかな」

「善処します。残りのFW達は何処にいますか？」

「ああ、スバル達はランニングしてるよ。多分、そろそろ終わると思うから」

「なのはさーん」

「シャーリ」

シャーリさんが、キャリーバックを転がしながらこっちに来た。それに、スバルさん達もこちらに来たようだ。

「それじゃ、みんな揃ったから訓練を始めようか」

「「はい」」

そうみんなで、答えたが。僕は面倒だ。こんなことは人前では言えないが。

「今、返したデバイスには、データ記録用のチップが入ってるから、ちよとだけ大切に扱ってね。それと、メッカニクデザイナーのシャーリから一言」

「えー、メッカニクデザイナー兼機動六課・通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。みんなは、シャーリて読んでね。みんなのデバイスを改良したり調整したりもするので、時々、訓練を見せ

てもらったりもします。あ、デバイスについての相談とかあったら遠慮なく言ってね」

「はい」

「じゃ、さっそく。訓練に入ろうか」

「・・・はい」

「でも、此処ですか？」

スバルさんやティアナさんも疑問があるらしい。僕もこんな所でどうやって訓練をするつもりなんだろ。わからん。さっぱりわからん。そう僕が疑問に思っているとなのはさんが笑い。

「シャーリ」

と呼びかけると。

「はい」

と答えると何もない空間にパネルをだし、操作しながら、「機動六課自慢の訓練スペース。なのはさん完全監修の、陸戦用空間シミュレーター。ステージ、セット」そうすると、何もなかった場所からいきなり廃墟のビル群が出てきた。これには驚いた。僕の顔は無表情のままだが。

「じゃあ、行こうか」

そう言っで。なのはさんを先頭に歩いた。

「まずは、リーダーのシューマを除いて訓練をしようか。私達は、ビルの屋上に行くまで、みんなは準備して、待って。行こうか。シャーリ、シューマ」

「はい」

僕達はビルの屋上まで行った。そこまで行くのに、シャーリさんは、なのはさんに運んでもらい。僕は、魔法を使いながらそこまで行った。なのはさんが運ぼうかと言われたが。体同士が密着するかもしれないし、男が年上で僕より背も高いが。女性に運ばれるのは何か恥ずかしいので丁重にお断りした。僕は男して意識されてないのかショックだぞこれは、男として。後、僕が魔法でビルの屋上を目指している時にみんなから見られていたので結局恥ずかしい思いすることになるのだが。

「みんな聞こえる？」

「はい」

「じゃあ。さっそくターゲットを出していこうか。まずは、軽く8体から」

ターゲットの破壊が目標の訓練だが。なのはさんは、どんなものをターゲットにするつもりなんだ。

「動作レベルC、攻撃性能Dでところですかね？」

「うん」

「私たちの仕事は搜索指定ロストログアの保守、管理。その目的のために、私たちが闘う事になるあいてはこれ」

そうなのはさんが言い終わった後に地上から出てきたのは、ガジェットドローンであった。確かにあれは、ロストログアを狙ってくるから、必ず出会うことになるだろう。しかし、あれの機能と対策を知らないとかなりてこずるぞ。まあ、スバルさんが言うには優秀な魔導師であり教導官のなのはさんのことだ。ちゃんと特性と対処法を教えてやらせるはず。僕がそう考えていると。

「では。第1回模擬戦。ミッション目的は、逃走するターゲットの破壊または捕獲。15分以内」

「それでは」

「ミッション」

「スタート」

合図ともに、始まった訓練。それよりかなり、難しくないかこれは。

「シャーリ、デバイスのデータちゃんと取っというてね」

「はい」

「シューマは、みんなのリーダーとしてデータや映像だけではなく、実際の動きを見て。まずはみんなのポジション後で私と決めていこう。それと質問があつたら遠慮なく言ってね」

「じゃあ。まず最初の質問、どうしてガジェットの機能と対策を教え

ずに始めたのですか？あとできんるですか。このミッション？」

「実際に自分たちで体験したほうが、良い経験になるでしょ。それにできても、できなくてもやることに価値があるからね」

良い経験で、言ったよ。この人もしかしてSなのか？

「ああ、それとこれが終わったら、次に私とシューマで模擬戦やるから」

「・・・はい？」

「だ・か・ら・模擬戦」

いや、笑顔で言われても。

「・・・どうして、僕と模擬戦を？」

「えーと、私が君がどのくらい強いのかを知るためとデバイスのデータを取るためだよ」

「え、あーそうですか」

あーあ、なんて面倒なことになったんだろ。できることなら今すぐに誰かと変わりたい。いきなり訓練場に謎の敵とか来たりして、訓練中止になったりしないか。そんなことないか。何で嫌なことは必ず起きるんだろね。

3話 訓練（後書き）

まずは、読んでくれてありがとうございます。

今日、vividとForceの最新刊を買った、火火火です。

どうしてたか、3話目は？感想やレビューを書いてくれると嬉しいです。

では、最後にいまさらですが、小説の更新は、1週間以内に1回を決めて書くことにしました。それでは、また次回の後書きで。

4話 シューマ・ハンメルVS高町なのは（前書き）

誰だって、誰かに殺意を抱く。

4話 シューマ・ハンメルVS高町なのは

僕は今、訓練場の中央に立っており、黒のジーンズに黒のスニーカー、黒い長袖のTシャツの上から黒くて長めのジャケットを羽織り、腰にはホルスターを巻き、そこには2本のナイフとカートリッジの弾が入っている。最後に両手には黒いグローブ。これが僕のバリアジャケットだ。前の訓練では、スバルさん達はガジェットの性能に最初は苦戦したが、なんとかクリアしたことに、僕は少なからず驚いていた。特にキャロちゃんの召喚魔法は初めて見た事、ティアナさんがAAランクのスキルを使えた事にだ。そしてこれから嫌々なのはさんと戦うわけだが、僕はあの人、ミット式で空戦魔導師で戦技教導官である事は、資料で見た。後、エース・オブ・エースとか呼べれてたり、破壊不可能と呼ばれた兵器を破壊したなどをスバルさんが熱弁していたことぐらいしか知らない。だから僕は、あの人、がどんな戦闘スタイルなのかさっぱりわからないのである。いや、ミット式なのだから射撃中心だとは思うが。それにしても勝てる気がしない。絶対に勝てない。そもそもランクが違う、ランクで強さが決まるとまでは言わなくても、Bの僕とAAのなのはさん（リミッターあり）ではかなりの違いがある。それに実戦経験の差もかなり違う。後、模擬戦をやると聞いた。スバルさんやキャロちゃん、エリオ君、シャーリさんは、露骨に勝てないとは言わなくても勝てないだろうなみたいなのと言っていた。ちなみに、ティアナさんは、絶対に勝てるわけじゃないでしよと言われた。本当の事だが、みんなの発言にすこしショックを受けた。その後、なのはさんはこれは僕の強さを測るためだとみんなに理由を話した事でみなさん、納得したみたいだ。そのみなさんはビルの上で見学である。そして今、僕のフメートル先になるバリアジャケット装備のなのはさんはなんか嬉しそうな顔している。

「それじゃ、今から始めるけど模擬戦の内容は、30分以内にシューマが私にクリーンヒットを入れることができたなら、そこで終了。もし時間以内にできないときや撃墜したら、何回でもやるから」

あれ、有効打撃だけで、いいのか？いや待てできなかったら何回もやるて。

「・・・いや、何回もやれませんか」

「じゃあ、1回でやればいいと思うよ」

おい、ふざけんな。この野郎。

「何で、普通に模擬戦をしないんですか？」

「もし、そうしたらシューマは、自分より強い私にすぐに降参したり、わざとやられるて、第4陸士訓練校の学長さんが教えてくれたら」

あのかそババア。

「それに、シューマの力はほとんどAランクぐらいだって、報告書に書いてあるから、有効打撃ぐらいななんとかなるでしょ」

誰だ。僕がAランク相当に匹敵する実力だとかウソを書いたやつ。それにクリーンヒットとは有効打撃の事だ。ちよとバリアジャケツトを裂くことでも、顔にかすり傷をつける程度でもだめだ。相手の的確なダメージを与える事が有効打撃だと僕は思う。あ、女性の顔に傷はさすがにまずいか。

「それじゃいくよ。よいい、始め」

えーい。くそ。確かに有効打撃ならなんとかなるはず。あ、今のな
んとかなるは、あのキャラの口癖だな。よし。まずは先手必勝、刀
子型のナイフ、名は戦刀の刃に魔力を込めての魔力斬撃をなのはさ
んに向け飛ばすが、簡単にラウンドシールドで防がれる。くそ、そ
れなりに魔力を込めたのに。そう思いながらまっすぐに突っ込むが、
なのはさん空中に飛び、

「そんな単純な突っ込みじゃあ、当たらないよ。アクセルシュータ
シュート」

4発のスフィアが僕に向かって飛んできた。

「パンツァーシルト」

僕は向かってスフィアに対して、手を前に出し、シールドで防御す
るが。

「アクセル」

そうなのはさんが言うと同時に、2つのスフィアはシールドにあた
り消滅するが、残り2つは軌道を変えて、後ろから僕に向かってく
る。思念制御がうまい。あんなに早く、操作できるなんて。あれだ
とまた、シールドで防ごうとしたら、避けられる。こうなったらも
う1本のバタフライナイフ、こっちの名は、影丸を取り出し、両手
に2本のナイフを構える。後ろを向きながら、影丸を振り回し、

「カートリッジ、ロード」

そうすることで、魔力を一時的に増幅させ、影丸のリーチを伸ばすために魔力によって、1メートルほどの刃を造り出す。これでスフィアを破壊する。すぐになのはさんに向けて、手だけを動かし、

「カートリッジ、ロード」

魔力を増加させた戦刀を投擲する。それと同時になのはさんに向かって、走り出す。走っている最中に影丸のグリップの部分にカートリッジの弾を入れる。両方とも1回に入る。カートリッジの弾数は1発で、直接装填しないといけない。

「また同じように突っ込んできても意味ないでしょ」

投擲してきた影丸に対して、回避しようとして移動しようしたと同時に、足に力を込めてなのはさんの方に跳び、影丸を両手で持ち、それをなのはさんに向け。

「カートリッジ、ロード」

刃に魔力を込めて、威力を強めて右手で投擲。体をそらす事で回避する。すぐに僕は、魔法陣を出すことでそれを足場にする。そして右手からスフィアを発生させなのはさんに向け撃つが。

「ラウンドシールド」

シールドで防がれてしまう。そしてシールドを消してスフィアを発生させようとする。

「デバイスも持ってないし、これで終わりだよ」

それはこちらのセリフだ。左手に持っている影丸の刃から魔力による刃を造りる。

「え？」

なのはさんは驚いているようだが、もう遅い。。伸びた刃で横腹に向け切る。が僕の予想していたより、なのはさんのバリアジャケットは硬く、刃を見ると血が出てないことから皮膚まで届かずにバリアジャケットを裂くことしかできなかったようだ。

「くそ」

僕が予想外の結果に不満に思いながらももう一度影丸で攻撃しようとするが、なのはさんがさっき発生させたスフィアで。

「シュート！」

その合図ともに5発のスフィアが僕に当たり、僕は吹っ飛ばされた。

「ぐっ」

地面と衝突して、その衝撃でダメージを受ける。くそ、あれで有効打撃に入ると思ったのだが甘かった。

「Mission complete」

「うん。ミッションクリア」

「・・・はい？」

なのはさんとそのデバイスのレイジングハートが言うがどうしてもミッションクリアなのかわからん。まだ有効打撃を加えていない。

「どうして、クリアなんですか？僕はまだ有効打撃を加えていませんよ」

「？、ちゃんと入っているよ。ほらここに」

そう言い、なのはさんは影丸で裂いたところを見せてくれるが、ここからじゃあ、5メートルほどの距離があるから見えない。

「いや、ここからじゃあ見えませんよ」

「わたった。じゃあ、後で見せるから。それと屋上にいるみんなも降りてきて」

あれ、クリアなら何で僕は、最後に攻撃されたんだ。

「なのはさん、僕がクリアしたあとで何で攻撃したんですか？」

「だって、シューマ、まだクリアしてないと思ってさらに攻撃しようとしたでしょ。それを防ぐためにとっさにああするしかなかったの」

そうなのか。

「さて、それじゃあ、みんなが来るまでに僕は投げたデバイスを回収しますよ」

「うん。それと質問があるんだけどいいかな？」

さてと、探すか。そう思い、歩きだす僕。

「何ですか？」

お、戦刀発見。

「あの戦闘中で私は二本ともナイフを投げたと思ったのに実はもう一本あったのは、最後にカートリッジを使った時にデバイスを変形させたから1本増えたの？」

さすがは戦技教導官。鋭い洞察眼だ。影丸も発見。

「そうですね。影丸は専用のカートリッジを使う事で、影を分身させてもう1本影丸を造り出します」

僕は影丸と分身したナイフを重ねた。

「なるほど。で、分身した方のナイフを左手で隠したわけね。あ、みんな降りて来たようだね」

「すごいー。シューマ、あのなのはさんに一撃入れられるなんて」

「ホントね。私、アンタは勝てないと思ってたわ」

「とてもすばらしい動きでした。シューマさん」

「勉強になりました。ハンメル二士」

「シューマがAクラス相当で、本当なのね。それよりどうしてクリ

アしたのにさらに攻撃しようとしたの？」

スバルさん、ティアナさん、エリオ君、キャロちゃん、シャーリさんの順にそれぞれ感想があるようだ

「いや、あれじゃあ、クリーンヒットにならないじゃあないですか？」

シャーリさんまで何を言っているんだ。それより周りのみんなの顔が不思議そうに僕を見ているのだが。

「・・・シューマの攻撃は私のジャケットにダメージを与えてるよ。これってクリーンヒットだよ」

「そうなんですか？」

「そうだよ」

「・・・そうですか」

なるほどそれもクリーンヒットなのか。覚えておこう。

「それじゃあ、今度はFW5人の連携の訓練を始めようか」

「「はい」」

それから夜になるまで、ずっと訓練だった。先に帰ったスバルさん達は終わった時にはすでに疲れきっているようだ。僕もそれなりに疲れた。今は片づけを終えて、なのはさんと一緒に六課の隊舎に帰るとちゅうである。別に2人きりだからといって、ラブ的な展開に

はならないのだが。

「シューマて古代ベルカ式だよな」

「そうです」

「古代ベルカ専用のデバイスは造るのが難しいのに誰が造ったの？」

そうなのか。初耳だ。

「シャーリさんも同じこと聞いてきましたけど。これは貰いものですよ」

「誰から貰ったの？」

「自称・最強を語る人にですよ」

「何なのそれ、変なの。じゃあ、その人は私より強いのか？」

たまに最強についての質問する人がいる。その中で自分より、強いのかと聞いてくる人に対して僕の返す言葉はいつもと同じように、

「ええ、強いですよ」

「そうなんだ。一度戦ってみたいな。そうだ、シューマは自分より強い相手に勝つためには自分のほうが相手より強くないといけないって聞いた事ある？」

「ええ、聞かれた事ありますよ」

「じゃあ、この言葉の矛盾と意味を答えられかも聞かれた？」

その問題はコラード三佐に訓練校時代にも聞かれた事がある。

「はい」

「その時はなんて答えたの？」

「そんなもん知りません。だけど自分より強い相手に勝つには勝てる状況にすればいいと思います。すて答えました」

「うん。それも正解の1つかもしれないね。それじゃあ、休憩所でFWの配置を決めて終わりにしようか」

というより、その問題の答えは人それぞれに違うと思う。にしてもやつと終わるのか、かなり長く感じた1日だ。

「はい」

4話 シューマ・ハンメルVS高町なのは（後書き）

4話 シューマ・ハンメルVS高町なのはとうでしたか？
どーも。火火火です。

さて今回は初の戦闘シーンを書きましたが、戦闘シーンを書くのはかなり難しいですね。読者のみなさまにちゃんと伝わっているとい
いんですが？もしその事で何か思うところがあれば、感想やレビ
ュを書いてくれると嬉しいです。では今回はこのへんでまた次回の後
書きで。

5話 アラート（前書き）

物語を上手に作る人は、頭がいいと思う。

5話 アラート

時計のアラームの音で目が開いた。今日は早朝訓練か。あー、2度寝がしたい。今すぐにも目を閉じて昼まで寝たいが、そんなことをした日には、なのはさんは本気で怒る。あの人、普段はニコニコしているが、怒ると怖い事が最近わかった。いいかげん起きよ。僕はベットから起き上がった。

「あ、シューマさんおはようございます」

エリオ君は着替え始めていた。この六課に来て2週間になるが、僕が起きる時にエリオ君が寝ている事が一度もない。同じ歳のキヤロちゃんもそうだが、2人ともあんまり子供らしくない。不満は言わないし、怒りもしない。たまに本当に10歳かどうか疑問を持つ。まあ、そんなことを言えば、僕はまったく笑わないので、殺し屋にお前、ホントに人間かよと疑問を持たれたが。

「おはよう」

僕はベットから降り、着替えを始めながらエリオ君に聞いてみた。

「エリオ君は早朝訓練がある日は起きるのが辛くないの？」

「いえ、そんなことはありませんけど。シューマさんは辛いんですか？」

「うん。こんな朝早く起きるのは辛いよ」

「でも、シューマさんは他の仕事などで、僕より寝るのが遅いからだと思いますよ」

「そうかな」

まあいいか。よし、着替え終了。

「訓練、行こうか。エリオ君」

「はい」

宿舎の前にはすでに、FWの女性組が集まっている。

「シューマ、エリオおはよう」

今日もスバルさん元気だ。その元気を僕に3%でも分けてほしい。

「おはよう」

「おはようございます」

「今日もやるぞ！」

本当に元気だ。

最近の訓練はほとんど5人と僕を抜いた4人のチームで連携が多い。なのはさん曰く、連携訓練が多いのは個人のスキルよりもチームでの連携のほうが大切であるらしい。最後に仲間を大切にしない奴はクズだよと某先生と似たようなセリフは言わなかった。

「はい、整列！」

疲れた。かなり疲れた。スバルさん達もかなり疲れているのがわかる。

「じゃあ、本日の早朝訓練ラスト1本、みんながんばれる？」

ここで無理ですとか言っても、それでもがんばってみようとか言われそうだ。

「「はい」」

「じゃあ、シュートイベーションやるよ。レイジングハート」

「All right. Axel Shooter」

なのはさんはミット式の魔法陣を展開し、そこから多数のスフィアを出した。

「私の攻撃を5分間被弾なしで回避できるか、私にクリーンヒットを入れればクリア。誰か一人でも被弾すれば最初からやり直しだよ。後、シューマは作戦を考えるだけで戦闘に参加したらいけないからじゃあ、がんばっていこう」

なるほど、Aクラスぐらいの僕（本当かどうかは知らん）が参加したら意味がないと思ったのだろう。

「なのはさん、作戦考える時間を5分ぐらいもらっていいですか？」

「いいよ、シューマ。じゃあ、5分後に訓練を開始するからね」

5分間ずっとスフィアを出しているつもりかあの人は。言ったのは僕だが。

「FWメンバー、集合」

僕の呼びかけで集まってくる。スバルさん達。

「えーこれから作戦を考えるのでみなさん、一緒に考えてください」

「アンタ、自分で考えるきはないの？」

「いや、僕1人で考えるより、みんなで考えた方がアイディアがいっぱい出るかなと」

「そう。じゃあ私の考えた作戦を言っわ」

さすがティアナさんあの短時間で考えると頭がいい。

「まずは私とスバルでなのはさんを引きつけて、キャロの強化魔法でエリオのデバイスを強化して攻撃する。このやり方でいいかしらシューマ？」

「それでいいと思いますよ」

訓練の結果はなんとかエリオ君の攻撃がなのはさんのジャケットに当たりクリアすることができたが、スバルさんとティアナさんのデバイスが限界らしく、僕を除くFW陣に新しいデバイスが支給されることになり、新デバイスの説明を受けている時に、アラート警報が鳴り、今はヘリで現場まで移動しながら、リン曹長の説明を聞

いてるところだ。

「任務は2つ、ガジエトを逃走させずに全機破壊する事、そしてレツリクを安全に確保する事。ですからスターズ分隊、ライトニング分隊の2組に分かれて、ガジエトを破壊しながら車両前後から中央に向かうです。レツリクはここ、7両目の重要貨物室。スターズがライトニング、先に到着した方がレツリクを確保するですよ」

「リイン曹長、僕は何をすればいいのですか？」

「シューマはライトニングと一緒に行動するですよ。私は現場に降りて管制を担当するです」

経験不足のライトニングに僕を付けるわけね。妥当な配置だな。

「さあて、新人ども。おっと、シューマはもう新人じゃあねえな。隊長さん達が空を抑えているおかげで、安全無事に効果ポイントまで到着だ。準備はいいか？」

「はい」

「スターズ3、スバル・ナカジマ」

「スターズ4、ティアナ・ランスター」

「行きます」

あー、こんな所から跳ぶのかよ。着地に失敗したらケガじゃあ済まねえよ。

「次、ライトニング。それとシューマ、リーダーとしてチビ2人をちゃんと見てやれよ」

隣を見ると、キャロちゃん是不安が顔に表れているが、エリオ君が優しく手を差し出し、それをキャロちゃんは握ることで不安はなくなっただらしい。エリオ君は将来いい男になりそうだな。

「じゃあ、行こうか。エリオ君、キャロちゃん」

「「はい」」

いい返事だ。

「ライトニング3、エリオ・モンディアル」

あれ、僕はコールサインがあるのか？なさぞだし言わなくていいか。

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエ」

「シューマ・ハンメル」

「「行きます」」

5話 アラート（後書き）

5話どうでしたか？読者の皆様は読み終わった後に前回より少ないと思います。

どーも、火火火です。

えー今回の文字数が少ないのは春休みが終わって大学が始まったり、アニメを見ていたりとしたわけでありまして、本当に申し訳ありません。次回から前回と同じくらいの量を書いていきます。
では、また次回の後書きで

6 話（前書き）

命
≠ 命

6話

さて、バリアジャケットを装備して貨物車に無事着地した僕らFWは2組に分かれてレツリクを確保しに行くのだが、陣形をどうしようか。

「エリオ君とキャロちゃんの2人と僕1人でまずは行動しよう。もし危険になったりしたらすぐにリイン曹長が僕が隊長達に応援を」

「了解」

「よし、行くか」

僕は影丸と戦刀の刃に六課の初日の訓練でティアナさんがガジェットを破壊した方法を応用して魔力を二重に重ねる。名付けてヴァリアブルソード。名前はパツクた。欠点は攻撃するたびに刃の魔力が削られるから、また魔力で覆わなければならない。まあ、これを使えば今までのガジェットなら倒せる。僕はガジェットの攻撃を回避しながら、攻撃していく。よし、次の車両に行くか。

今、僕は7両目にいるガジェットを全滅した。このままだったら、無事に確保できそうだな。次の車両に行ったら、そこで屋根の上にいるエリオ君とキャロちゃんを発見し、車両内では新型らしき大型のガジェットがいた。

「エリオ君、キャロちゃん、大丈夫？」

「シューマさん」

「あのガジェット、今までのと何か違うところがある？」

「はい。フリードのブラストフレアを簡単に弾き飛ばしました」

「そう。じゃあ、まず僕が突っ込むからその隙にエリオ君は攻撃」

「了解」

僕は両方のデバイスを構えて、ガジェットに攻撃するが、硬すぎる。傷一つ付かない。エリオ君の攻撃も効いてない。さらにガジェットはAMFを発動し、これが車両全体までに届き、僕とエリオ君の強化魔法とキャロちゃんの魔法陣も消してしまった。

「AMF！」

「こんなに遠くまで」

エリオ君とキャロちゃんは驚いているようだ。僕も驚いた。こんなに広範囲まで。

「多分、コイツがデカイからAMFの範囲も広いんだろう」

くそ、どうする。このままじゃあまずい。このデカブツ、レーザを僕達に狙いを付けやがった。

「エリオ君、回避」

「はい」

僕は左側に回避し、エリオ君は跳んで後ろに回避したが、ガジェットはエリオ君の方にさらに攻撃を仕掛けてきた。やつのアームにエ

リオ君は捕まり、そのまま外に放り投げやがった。

「くそ」

あのままじゃあ、地面と衝突してペシャンコだ。隊長達に応援を呼ぶしか。

「エリオ君ー！」

屋根の上にいるキャラちゃんが飛び下りている。くそなにやってんだ。応援を呼ばないと。

「なのはさん、エリオ君とキャラちゃんが落下してるのを助けてください」

「助けなくても大丈夫だよ」

は？なに言っただこの人。

「大丈夫って何がですか？」

僕がガジェットの攻撃を回避するために車両の屋根に飛び移ると、なのはさんが大丈夫だと言っていた理由がわかった。エリオ君とキャラちゃんが大きな竜に乗っている。

「ね、大丈夫でしょ」

「・・・ええ、そうですね」

あれはキャラちゃんの竜召喚、でもあれは制御ができないと資料に

書いてあつた筈。あ、ガジェットが屋根の上に上がってきた。

「エリオ君、キャロちゃん、ケガとかない？」

「あ、はい。僕もキャロも大丈夫です」

「そうかい」

「シューマさん、フリードで遠距離攻撃を行うので離れてください」

「了解、キャロちゃん」

僕が後ろに下がると同時に特大の火炎弾がガジェットを攻撃するがたいして効いていない。

「エリオ君、キャロちゃんに威力強化の魔法をかけてもらて、僕が邪魔なガジェットのアームを壊すからそうしたらエリオ君は本体に攻撃」

「了解」

僕はアームだけを壊すことだけに集中して。

「カートリッジロード」

二本のデバイスのグリップからカートリッジをそれぞれ1本ずつロードすることで刃を強化、その強化したデバイスでアームを切り裂き、最後にエリオ君が本体に攻撃することでガジェットを破壊した。

「エリオ君、ナイス」

「いえ、シューマさんのお陰ですよ」

「謙虚だね」

「スターズF、レリックを確保しました」

「了解」

これで終わりか。あー疲れた。にしてもキャロちゃん飛び下りたのはビックリした。

「シューマさん、私たちライトニングと一緒に現地の局員に事後処理の引き継ぎをお願いします」

「了解。あ、キャロちゃんどうして竜召喚できたの？」

「えと、その大切な人達を自分の力で助けたいと思ったからです」

「・・・そう」

キャロちゃんは本気で助けたいと思ったのだろう。本気になれることはすごい事だ。良い意味でも悪い意味でも。すごいと思う、でも羨ましいとは思はない。ああ、仕事面倒だ。

「いいか。ハンメル、貴様は今まで敵の隙を突いたり、小技で敵を倒してきたが、それは貴様を知っている相手や本当に強い奴には勝てんぞ」

初の出勤から数日が過ぎ、今日も訓練である。にしてもなんで僕の

訓練の相手がシグナムさんなんだ。一撃がかなり重い、手加減しろ。ランクはあまり大差ないのに実際にやってみるとかなりの差があるな。

「ハア！」

「うお！？」

吹っ飛ばされた。これで5回目だ。

「シグナムさん、戦い方とか技術的な事は教えてくれないのでしょうか？」

「私が教えられる事は敵の懐に切れぐらいしかない。それに貴様は他のF Aメンバーに比べて基礎が出来上がっている。後は私の動きや技を見てそれを盗め」

なんだよ。動きや技を盗めって何も教えてくれない板前長の料理のやり方を盗む板前見習いかよ。その後、さらに4回吹っ飛ばされた。こんなで午後の仕事大丈夫か？

6 話（後書き）

どーも火火火です。

まずはすいません。前回の後書きで前話と同じぐらい書くと書いていながら書けませんでした。当分は6話と同じぐらいの文字数になると思います。本当にすいません。

えーでは後書きはこの辺で。ではまた次回。

7話 ホテル・アグスタ（前書き）

無自覚に希望を与えるな。

7話 ホテル・アグスタ

「最近、エリオとキャロの様子どう？」

そう聞かれたのはに地上本部に保存しているレリックとガジエットの残骸データを調べるために向かう途中、車の中でフェイトさんに聞かれた。2人の保護者だから気になるのだろう。

「はあ、どうと言われても2人ともいい子だと思いますよ。まあ、子供らしくはないと思いますけど」

「どんな所が？」

「何か痩せ我慢している所ですかね。文句を言ったりしないんです」

「確かに。六課に来るまでも少し痩せ我慢する所はあったけど、その時は子供扱いされる嫌なのかって思ってたけど、今は全然、文句も言わないんだよ。なんか私、保護者として頼られてないのかな？」

「・・・なんかフェイトさん落ち込んでないか。僕が子供らしくないとか言った所為なのか。なんか罪悪感を感じるんですけど。」

「あー多分、フェイトさんに心配して欲しくないからと思いますよ」

「・・・そうかな」

「そうですよ。それに本当に辛くなったら、相談すると思いますよ」

「そうだね」

なんとか立ち直ったようだけど、この人と会話する時、下手に変なこと言わない方がいいな。言つと落ち込む方し、そうなると言った方はかなりの罪悪感を感じるんだよな。さっきのように。

「このレリックって結局何に利用するんでしょうね？」

今、僕たちは地上本部でレリックとガジェットについて調べているところである。

「それが解ればロストロギア指定にならないよ」

確かに。

「シューマ、ガジェットの残骸データを表示してくれない」

「はい」

キーを押しながらガジェットのデータをだす。

「シグナムさんやヴィータさんが捕えた新型も基本構造は変わりませんね」

「あ！」

「どうかしましたか？」

「シューマ、この部分見て」

フェイトさんが指す方を見てるとそこには青い宝石みたいなのがあ

った。

「何ですかこれ？」

「ジュエルシード」

「ジュエルシードですかそれ？」

「10年前、私となのはが集めていたロストログアだよ。でも今は本局で保管しているはずなのに」

「・・・10年前って、今19歳だから9歳の頃からロストログア集めてるのか。恐ろしいな2人とも。それより保管してあるやつがないってまずくないか。」

「それってまずいんじゃないか」

「そうだね。・・・シューマ、その金のプレートみたいな所拡大してみて。何か書いてある」

「はい。これじえいる「ジェイル・スカリエッティ。ロストログア事件を関連として数えきれないぐらいの罪状で広域指名手配されている一級指名の次元犯罪者だよ」

「フェイトさんが出してくれたジェイル・スカリエッティのデータには確かに数多くの罪状が載ってあった。」

「ちょっと事情があつてね。この男の事は数年前からずっと追っているんだ」

実はこの人はフェイトさんの親の敵だったり。まあ、違っただろ。

「何でそんな犯罪者がわざわざ自分の手がかりを残したんですか？」

実はフェイトと分かればなれになった親だったり、そのために自分を知ってもらったために手がかりを。なんて奴だ自分が捕まるかもしれないのに。愛情の深さを感じる。いやこれも違うな。

「本人だしたら挑発、他人だったらミスリード狙い。どっちにしても私やなのはがこの事件に関わってるって知っているんだ。けど本当にスカリエッツティだしたらロストログア技術を使って、ガジェットを製作できるのも納得できるし、レリックを集めている理由も想像が付く」

「はあ」

「つか待って。なんであなたとなのはさんが関わってるって事をジエイル・スカリエッツティが知ってる事が解るんだ？エスパーかあなただ。それに理由って何？」

「シューマ、このデータを纏めて隊舎に戻ろう。隊長達を集めて緊急会議をしたいんだ」

「あ、はい」

「ではもう一度説明するのでよく聞くように」

僕は今、ホテル・アグスタの裏手で前に立っているシグナムさんとヴィータさんの説明を他の隊員と一緒に再度聞いている。まあ、話を纏めるところでオークションがあり、そこでロストログア関連の

品もあるからそれをガジェットがレリックと誤認して襲撃してくるかもしれないので六課が護衛に呼ばれた。他のFWとはやてさん、隊長達、シヤマルさん、リンさん、ザフィーラさんは明日来るらしい。後、現状だがガジェットの製作者とレリックを集めているのはジェイル・スカリエッティに決定した。この反則みたいな部隊に狙われるとは可哀想に。

「では、それぞれ各持ち場に付け」

「「はい」」

オークション当日。他のメンバーと合流して今日も警備を行っている。ああ、ガジェット来るなよ。面倒だから。

「アンタ、バカでしょ」

一緒に警備しているティアナさんからバカ呼ばわりされた。

「何がですか？」

「隊長達に対しての褒め言葉よ」

「女性との付き合いがない僕にはあれが精一杯なんですよ」

「だからってあれはないでしょ」

合流した時にドレス？を来た隊長達と八神さんがいて、八神さんに「どうやシューマ綺麗やろ？」と聞かれて「グラビア雑誌の表紙を飾れるほど綺麗ですね」って答えたら八神さんが持っていたバックで頭を叩かれ「どんな褒め方や！」と突っ込まれた。

「あ、スバルから聞いたんだけどアンタ、八神部隊長や副隊長達について結構詳しいって聞いたんだけど？」

「いや、そんなに知りませんよ。どうしてそんなこと？」

「ちょっと気になっただけよ」

「そうですか。！？ティアナさんこれって」

「ええ、そうね。ガジェットがこっちに向かっているようね。私はシヤマル先生に前線のモニターを貰ってくる」

「はい。じゃあ、先に行ってます」

「ええ」

くそガジェットのヤツいちいち、反応しやがって。

（シューマ、私だ）

これは念話ヴィータさんからだ。

（ヴィータさん。どうしたんですか？）

（お前がFWのリーダーだ。新人たちの事任せたぞ）

（はい）

「エリオ君、キャロちゃん」

「シューマさん」

「おい、みんな！」

「スバルさん」

「あれ、シューマ、ティアは？」

「ああ、シャルさんに前線のモニターを貰いに行きました。すぐこちらに来ると思います」

「待たせたまわね」

「ティア！」

これで全員集合か。

「みなさん、もしかしたらこっちに来るかもしれないのでジャケットを装備してください」

「了解」

さてと副隊長達が全部倒してくれないか。

7話 ホテル・アグスタ（後書き）

どーも火火火です。

7話 ホテル・アグスタどうでしたか？

オリキャラ以外の登場人物はこんなでいいのかなと時々思います。読者の皆様にとってはこの人物はこんなことはしないと思うところがあるかもしれません。もし性格やしゃべり方が違っていたらすみません。感想などでそれを書いてくれると嬉しいです。ではこのへんでまた次回の後書きで。

8話 シューマ・ハンメルVSゼスト・グランガイツ（前書き）

世の中が平和になる方法は簡単だ。人類が絶滅すればいい。

8話 シューマ・ハンメルVSゼスト・グランガイツ

「じゃあ、この指揮はティアナさんに任せますけど、無茶だけはしないでくださいよ」

「わかってるわ」

「行きましょうか。リンさん」

「はいです」

ロングアーチとキャロちゃんが敵が召喚魔法を使ったこと察知し、地上から僕が、空からリンさんで分かれて察知した場所に行くことになった。

「シューマ、召喚師はかなりの高い魔力を持っています。私たち二人では勝てない可能性があるのです。どっちか1人が姿を確認したら電話で連絡してすぐに撤退を」

「了解」

さてと敵に遭遇するまであと数十メートル。にしても敵が1人だといいな。いや1人じゃないと困るもし数人いたら逃げる可能性が減るじゃないか。あー面倒だ。なんか最近、面倒が口癖になってないか。あ、少しスピードを落としたらリンさんの方が先に着かないか。そうしたら僕は敵に遭遇しなくて済むじゃないか。でもスピード落としたらすぐにロングアーチにばれそうだな。あー面倒だ。もう完璧に面倒が口癖だな。さてとそろそろ敵とご対面か。ん、念話リンさんから。

（すみませんです。敵の攻撃を受けて撤退します。シューマはこのまま敵の攻撃に気を付けて進んでください）

「・・・了解、リイン曹長」

くそ、1人で行くのかよ。チッ、こっちにも変な虫みたいのが来たな。

「カートリッジロード」

戦刀に魔力を込めて魔力の刃を造り、それで虫を破壊する。破壊したことで敵にばれたな。あーどうしょ。このまま1人で行くのか。逃げられるかな。そろそろ敵とご対面か。

「で、どっちが召喚師、それとも両方とも召喚師なのか？」

目の前には10歳ぐらいの女の子と30後半ぐらいの男がいた。

「答える義理はないな。ルーテシア、下がって、品物の確保を。こいつの相手は俺がやる」

「わかった」

あの女の子がルーテシアちゃんね。

「いや、僕は戦うつつもりはありません。だから逃がしてもらっていいですか？」

「貴様がどうであろうと姿を見られたからには逃がすわけにいかん。

結果展開」

くそ、やられた。これじゃあ逃げねえ。それにあの女の子もいない。外にいるのか本当に1人でやるつもりだ。

「今、張った結界はあそこで戦っている騎士程度の力量では壊すことはできんし、ガジェットと戦っている。それにここでは通信もでんぞ」

確かにこの結界、そうとう硬いし、念話もできない。それにこれほどの結界を張るやつだ。絶対に僕より強い。あーこれはやばいな。僕が結界の中に閉じこまれた事はロングアーチには解るが、あいつの言うとおり前線のみんなはガジェットの相手をしてるし、リミッターのある隊長たちじゃあ壊せないし、リミッターを外すのは申請の時間が掛かりそうだな。じゃあ僕がやる事はリミッター外した隊長達が来るまでの時間稼ぎか。もし来ないと死ぬな。僕は影丸を構える。

「行くぞ」

敵が槍型のデバイスも構える。形状から見ると多分、アームドデバイスだな。そうなると僕と同じベルカ式か。

「どうぞ」

敵がこちらに突っ込んでくる。影丸に魔力を込めて魔力斬撃を飛ばすが簡単に槍で防がれる。来る！

「カートリッジロード」

上から来る一撃を影丸で受け止めるがすぐに、弾かれ影丸は吹っ飛ばされた。どんだけ差があるんだよ防御したつもりなのに全然意味がない。敵は休まずこちらに攻撃を加えようと来る。攻撃を防ぐのは無理だ回避に専念したほうがいいな。攻撃を何度か避けるが行動を誘導され最後には一撃を喰らった。後はその繰り返しでどんどんダメージを受ける。戦闘の経験が違いすぎる。

「中々、良い腕だな。若い騎士」

「ハア、ハア、ハア、僕は確かにベルカ式だけど、騎士とか言われるの嫌いなんですよ。なんか堅そうなイメージがあって、それに敵に殺^ヤられるくらいなら自害した方がマシと思ってそうですし」

自害した方がマシってバカだろ。

「そうか。ではこれで終わりだ」

最後の一撃が振り下ろされる。僕はここで死ぬのか？死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ！今まで殺されようとした時と同じ感情が僕の中で芽生えた。死にたくない。なにがなんでも生き残ってやると。そう思った時には魔力で体全を強化し、敵の攻撃を回避していた。

「お、まえ、何故・・・その瞳は・・・」

何で驚いてんだあの騎士？つかどうしてあんなに早く強化ができたんだ？それに瞳？ああ、なるほどね。この感覚はあの状態か。道理で素早く体を強化できたわけだ。にしても相変わらず、自分が死にそうにならないと開眼しないとは。

「その金色のベルカ式の魔法陣を宿した瞳、魔迅眼^{ましんがん}。お前は何者だ？」

「ただの管理局員ですよ」

明らかに動揺してるな。当たり前か。この目を持っている人達は死んでいる事になっているからな。

「あなたが強力な結界を張ってくれて助かりました。これでほかの部隊メンバーにばれる事ありません。じゃあ今度はこちらから攻めますよ」

「くっ！フルドライブ！！」

「……っ！！？」

一瞬、何が起こったのかわからなかった。奴がフルドライブと言っ
てすぐ、気付いていたら倒れて、攻撃を受けた事が解った。

「……ぐっ、がっ」

口から血が出る。くそ、肋骨が折れた。それに腕も。体がメチャク
チャいてえ。何だあの威力と速さは？この目でも対応できなかった。
この人、本当に強い。

「ハア、ハア、ハア。お前にいくつか聞きたい事がある」

「……何ですか？」

「その目を持っているという事はエグリア・D・バイベルトの息子

だな」

父親の知り合いか？まあ、この目を見られたんだ。誤魔化しは意味ないだろ。」

「・・・そうですよ。どうしてわかったんですか？」

「やはりな、よく見れば顔立ちが奴に少し似ている。しかしお前がどうして生きている？6年前に死んだことになっているはずだ」

「・・・さあ、どうして僕は生きてるんでしょうね。母親も妹も見殺しにしたのに」

大切な人が目の前で死にそうなのに何もできなくて、でも自分が死にそうな時だけこの目が発動して何とか生き残って。

「見殺しだと？いったい何があった？」

聞いてくるなよ。思い出すだけで死にたくなるからさ

「・・・答えるわけないでしょ。自分の嫌な過去を他人に」

「・・・そうだな。お前が奴の息子なら殺すわけにいかなくなった。この結界は俺がいなくなると同時に消えるから安心しろ」

「僕を殺さないんですか？」

「友人の息子を殺せるわけないだろ。それに自分が死んだらお前とお前の兄を気にかけてやってくれないかと頼まれたのだ」

「そんな理由で？」

「お前にとってはそんな理由かもしれないが俺にとっては大切な理由だ。じゃあな」

そう最後に言うつと消えて、それと同時に結界も消えた。なんだよあの人、メチャクチャかつこいいんだけど。

「シューマ！」

この声は。

「・・・何ですか？ヴィータ副隊長」

「おい、大丈夫か。お前！」

「・・・大丈夫ですよ。だからそんなに大声ださなくてもいいですよ」

あーそういえば、あのルーティシアちゃんって子可愛かったな。それとガジェットはどうなったんだろう。まあ、副隊長達がいるから安心か。あの人達、強いから。

8話 シューマ・ハンメルVSゼスト・グランガイツ（後書き）

どーも、火火火です。

8話どうでしたか？

今回は魔迅眼というオリジナル設定を出しましたが、まあ、この時点でどんな能力かわかった人が多いと思います。後、自分の書いた文章は皆様には伝わりにくいかもしれません。もしわからない表現などがあつたら感想に書いてください。うまくできるかどうかはわかりませんが、ちゃんと説明をします。
えーではこのへんでまた次回の後書きで。

9 話 事後報告そして（前書き）

人はいつだって、矛盾している。

9話 事後報告そして

目が覚めたのは六課の医務室で、辺りが真っ暗なので多分深夜なのだろう。僕が倒れてからいつたい何日が経ったんだ？・・・体はまだ少し痛いな。

「君が笑顔になれないのは、笑顔がないわけではなく、できなくなっただろうね」

「どっちにしてもぼくはえがおはできないってことでしょ。せんせい」

「違うわよ。できなくなっただって事は前はできたってことよ。だからまたいつか笑顔になれると思うわ」

「そんなことよりマンガかしてよ、せんせい」

「いや、ちゃんと話聞けよ」

その会話は僕が入院していた時に先生のところに漫画を借りに行った時だ。まあ、その時は先生話なんか正直どうでもよかったのだが、今も僕は笑顔になれない。多分、あの事をなんとかしないとダメなんだろうな。まあいいや、寝よ起きた時には太陽も昇っているだろう。それに召喚師の事も聞かれるだろう。あー父親の友人とかあの人言っただけ、名前知らないな。

「で、シューマの話を纏めると襲撃して来たのは2人組で女の子の方が召喚師でもう1人がベル力式の騎士ってことでいいのかな？」

「はい、そうです」

目が覚めた時に医務室にいたこの部屋の主、シャルル先生に隊長、副隊長達が待合室に来るようにと言われた。後、ケガはまだ治っていないらしい。その証拠に僕の左手にはギブスが装備してある。で、今ははやてさん、隊長、副隊長達に僕が遭遇した2人組について説明している。ちなみにあの人が僕の父親と友人であることは言わなかった。だって言ったら、面倒になるし。

「うん、わかった。じゃあ、また何か思い出したら教えてね」

「了解しましたなのはさん。あ、それとアグスタに襲撃したガジェットは全機破壊したと思いますけど、何か変わった事はありませんでしたか？」

「・・・ティアナが戦闘中にミスショットをしてな」

少し思い詰めた様な顔で話すヴィータさん。何か嫌な雰囲気だな。

「ティアナさんが？でもミスショットなら別に大したことは」

あの人ミスショットを。

「いや、それがアイツ、ガジェットを倒そうとして無理をしてなスフィアのコントロールを間違えてそれがスバルに当たりそうになつてな」

確かにそれはまずいな。当たったらケガしていたかもしれない。でも無理をしなきゃいけないほどに戦況が悪かったのか？確かに召喚師のせいでガジェットの動きが良くなって倒すのが難しくなったの

だろうが、それでも副隊長達やザフィーラさんがピンチになるほど強くなつてないはずだが。

「ティアナさんが無理をするほどに戦況は悪かつたんですか？」

「いや、確かに私やシグナム、ザフィーラも苦戦し、最終防衛ラインまで侵入されたが、別にピンチになつたわけじゃない」

「だったらどうしてですかヴィータさん？」

「それはわからねーけど、ティアナのことを訓練で見てわかつたことがあるんだが、若い魔導師なら強くなりいなんてみんなそうだし、無茶も多少はするけど、時々度を超えている。アイツここにくる前に何かあつたのか？」

多分、あるだろう。誰だつていい事や嫌な事、大小の差はあつても、特に魔法の資質を持つ者なら。

「ティアナにはお兄さんがいたの。ティータ・ランスター一等空尉、所属は首都航空隊享年21歳」

そう言つてしゃべり始めるのはさん。なんか嫌な話になりそうだな。

「けつこうなエリートだな」

確かにヴィータさんの言うとうり、首都航空隊はエリートで構成されている部隊だ。しかも21歳の若さで。

「そうエリートだったからなんだよね。ティーター一等空尉が亡く

なった時の任務逃走中の違法魔導師に手傷を負わしたんだけど取り逃がしちゃて」

エリートだから凶悪な犯罪者と当たりやすいってことか？

「まあ、地上の陸士部隊に協力を仰いだお陰で犯人はその日の内に取り押さたそうなんだけど」

「その件についてね心ない上司がちょっと酷いコメントをして一時期問題になったの」

「コメントって？」

「・・・犯人を追いつめておきながら取り逃がすとは何事かとか、この役立たずとかね」

「やな上司だな」

まったくだ。

「ティアナはその時まだ10歳。たった一人の肉親を失くして、しかもその最後の仕事が無意味で役に立たなかったって、きつものすごく傷付いて、悲しんだはず」

まあ、そうでしょ。それより、自分の過去がしゃべってもない人に知られるのはいい気分じゃないよな。それが良い人でも僕の過去がもみ消されて本当に良かった。だって、あの事がばれたらどんな目に遭うか。すでに実証されるじゃないか。あー空気が重いな。

9話 事後報告そして（後書き）

まずはいけません。更新がこんなに遅くなるとは思いませんでした。えー前回の更新が終わった時にはアニメの8、9話辺りをどうするかまったく考えていなかったたので時間がかかりました。本当にすいません。

今後も更新が週1でやれるかどうかはわかりませんが、今後ともがんばって書いていくつもりなのでよろしくお願いします。

10話 模擬戦（前書き）

100点と99点以下の差は完璧であるかどうかだ。

10話 模擬戦

左腕の骨と肋骨の骨も治って今日から訓練に復帰することになった。魔法の力ってすごい。そしてシャル先生すごい。いや、シャル先生はすごい。ここは本当だから復唱した。

「さーで、午前中の纏め。2on1で模擬戦やるよ」

今日も元気なのはさん。いやー本当に感心するな。嘘だけど。なんかこの嘘だけど癖になりそう。このままだと某ラノベの主人公みたいに嘘だけとか、嘘じゃけえとか頻繁に使うかも。いや嘘ですよ。本当に。

「シューマとエリオ、キャラは私と見学だ」

「「はい」」

「やるわよ、スバル」

「うん」

気合い入ってるな最近、スバルさんとティアナさんの2人で特訓してたしな。何か作戦でもあるんだろうか。で、場所を変えてビルの屋上に移動。

「あ、もう模擬戦始まちゃてる？」

「フェイトさん」

「私も手伝おうと思ったんだけど」

「今は、スターズの番」

「本当はスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね」

「ああ、なのはもここん所訓練密度が濃いからな。少し休ませないと」

「なのは、部屋に戻ってからずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり」

そんなにがんばってるのか全然そんな風には見えないが。まあ、僕は怪我してから訓練に参加しなかったからな。

「なのはさん、訓練中もいつも僕たちのこと見ててくれるんですね」

「本当にずっと」

エリオ君とキャロちゃんの順に感想を聞いて少し嬉しそうなヴィータさん。

「お、クロスシフトだな」

ティアナさんが複数のスフィアを飛ばしているが。

「何かキレがないな」

「コントロールはいいみたいけど」

結局、ティアナさんの放ったスフィアはなのはさんに当たる事はなかった。次にウィングロードで足場を作って接近するスバルさんそれに対して複数のスフィアを放つなのはさんだが、それをシールド魔法で防ぎ、なのはさんに攻撃をするがシールドで弾かれる。

「砲撃？ティアナが？」

確かにビルの屋上に魔力を集束させているティアナさんがいるあの人が砲撃系の魔法を使った所は見た事がないけど、使えてのか。

もう一度接近スバルさんなのはさんのスフィアを避けて攻撃するがまたシールドで防がれる。

「あっちのティアナさんが幻影！？」

「本物は？」

屋上にいたティアナさんは消えて、ウィングロードを走りながらデバイスの銃口から魔力の刃を造り、なのはさんの頭上まで来て、なのはさんに刃を向けてそのまま落下した。驚いたティアナさんが接近をするなんて。ティアナさんとなのはさんが衝突して煙が舞った。

煙が晴れるとそこには魔力によって中に浮いているティアナさんと拳でスバルさんの攻撃を防いでるなのはさんがいた。・・・・・・何だあれ？どうして体で防いでるんだ？後、デバイスは待機状態に戻したのか？よく見ると刃を手で止めているから血が出てる。何でわざわざあんな防ぎ方を？すると、ティアナさんが距離を取り、別のウィングロードに着地し、泣きながら攻撃をしようとするが先に

なのはさんの攻撃がティアナさんに当たった。これで終わりだな。そこでなのはさんがスバルさんにバインドを仕掛けた？あれ何でバインド？もう終わったんだろ。あの人、手に魔力を、また攻撃するつもりだ。そう思っている間に攻撃が当たって、倒れた。・・・もしここにあの最強でもいればカツコイ主人公みたい止めに入ったりするのだろうか。

「おいシューマ、スバルと一緒にティアナを医務室まで運んでやれ」

ああ、なのはさんメチャクチャ怖い。でも人って奴はちよとしたことでコロコロ変わるから別に不思議には思ないけど。

「・・・あ、はいヴィータさん」

これからどうやって仲を取り持つつもりなんだろう。・・・ティアナさんをよく見るとたいした怪我はしてないようだな手加減はしたんだろうな。でもいくらティアナさんの行動がセンターガードらしくないからって、あれはやりすぎだろ。まあ、そんなことを言った暁には僕もボロボロにされそう。さすが管理局の白い悪魔（本局に行ったら誰かが話していた）マジで強いぞー。

10話 模擬戦（後書き）

この回ではテレビ放送版とDVDでなのはさんの顔の表情が全然違いますけど、皆様はどちらがいいですか？私はテレビの方がいいと思います。そっちの方が怒っている感じがあつてよかったです。後、主人公は主人公らしくない所が出てたらいいなと思います。では感想があればうれしいです。

11話（前書き）

今日も誰かが不幸になった。

11話

僕は自室のベッドで音楽を聴きながら、ラノベを読んでいる。何時、出勤命令があるかわからないので、音量は小さい僕が聴いている音楽は中二臭くてアニソンやゲームの曲が多いと思う。けど歌手が同じだからといってその曲を聞くことはない曲を選ぶのはリズムや歌詞で選ぶ。ラノベは、毎月買っている（でも読む時間がなかなかない）、服とかは買わないので娯楽に回す金はそれなりある。

「・・・シューマさん、あれで良かったんですね？」

イヤホンを外して「何が？」と答える僕

「あの模擬戦の事ですよ」

あの模擬戦ってことはなのはさんがティアナさんをボコボコにした模擬戦のことだなよな。

「別にいいんじゃない」

真面目に答えると面倒になりそうなので言わないが、あれはやりすぎだ。一樣、アグスタの時になのはさんはちゃんと云ったらしいが、うまく伝わっていなうだったら、あの模擬戦の時にちゃんと言えればいいのだから自分の役割をちゃんとやれと、どうせ遠い回しみたいな言い方で私が言ったこの意味をよく考えてみてね的な事が伝わってると思っているのだろう。

そんなの伝わるわけないだろ。まあ、他人に自分の思いが簡単に伝わったら人はもっと孤独になる。これは自分の考えが他人に筒抜けになった国の話のラノベがあったな。感想を考えていたのでページ

が進まない。

「・・・でもあれじゃあティアナさんが」

「まーそれはなのはさんが何とかするでしょ」

他人任せでいいや。

すると部屋全体に警報が鳴り響いた。これはアラート。一体何が起こったんだ？

「シューマさんこれ！」

「何かあったみたいだね。行こうか」

「はい」

今、隊舎の屋上で海岸に出現したガジェットの対応の指示を隊長達に指示してもらったために集合している。

「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の三人」

「みんなはロビーで出動待機ね」

できれば空戦だけで終わってくれないかな。そしたら僕は出なくていいのに。本当に頼むぞスカリエティ、ガジェットの出現をこれだけにして。もしいつか会ったらアメちゃんあげるから。

「そっちの指揮はシグナムだ留守を頼むぞ」

「「「はい」」」

「・・・はい」

「ああ、それからティアナ。ティアナは出動待機から外れておこつか」

「!？」

「「え!？」」

「え!？」

ティアナさん、エリオ君&キャロちゃん、スバルさんの順にそれぞれ驚いている。僕としてはベストではないティアナさんは確かに待機してた方がいいな。

「そのほうがいいな。そうしとけ」

「今夜は体調も魔力もベストじゃあないだろうし」

「・・・言うこと聞かない奴は使えないってことですか」

「・・・あれ？何かティアナさん怒ってないか。

「自分で言っけてわからない当たり前の事だよ。それ」

そしてなのはさんあなたも怒っているのでしょうか？

「現場での指示や命令は聞いてます。教導だつてサボらずやつてます。それ以外の努力や場所で教えられたとうりじゃないとダメなんですか！私はなのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能もキャラみたいなレアスキルもない。少しぐらいムチャしたつて、死ぬ気でやらなきゃ強くなつてなれないじゃないですか！」

すげー怒つてる。それに対してイライラしてないか副隊長達。あ、シグナムさん拳に力を込めて殴る気ですか。あーついに殴つてしまった。グーで痛いだろう。

「心配するな加減はした。ダダをこねるだけねの馬鹿はなまじ付き合つてやるからつけ上がる。ヴァイス出られるな」

「乗り込んでいただければ」

「目障りだ。いつまでも甘つてたれてないでささと部屋に戻れ」

「シグナム副隊長」

「何だ？」

「命令違反は絶対ダメだし、さっきのティアの物言いとが、それを止められなかった私はさらにダメだと思います。だけど自分なりに強くなろうとするのとかきつい状況でも何とか頑張ろうとするのつて、そんなにいけないことなんでしょうか！自分なりの努力とかそういうのもやつてはいけないんでしょうか！」

「自主練習もいいことだし、強くなるのもいいことだよ」

「シャーリさん」

「持ち場はどうした？」

「メインオペレートはリイン曹長がいてくれますから。何かもうみんな不器用で見えられなくて。みんなちよと集まってロビーで説明するから。なのはさんの事となのはさんの教導の意味」

いや、僕は興味も関心ないので外れていいですかとは言い出せる雰囲気ではなかった。

あの後、シャーリさんがなのはさんの過去について教えてくれた。9歳の頃から前戦で戦い、負担が掛かる集束魔法を使い、そのツケで大ケガを負ってもう二度と飛べないと言われても死に物狂いでリハビリして復帰した事を。そのことからみんなには自分と同じ思いをして欲しくない事。

まあ、そのことを聞いて僕が思う事はなのはさんの事を何時から取っているんだ？あれってどう見ても盗み撮りじゃないか。なのはさんの成長日記でもだれか付けてたのか？今は局のお偉い方達のおかずになっていたりしてな。そんなわけないか。あーあ、どうして人が真面目な話をしている時に僕はどうでもいい事を考えるのかな。さてこれで今回のゴタゴタも終わったようだし部屋に帰って寝るか。

11話（後書き）

まずはいけません。こちらのミスで話ができないのに更新をしていたようです。本当にすいません。えーもしかした皆様の中に間違つて更新した方を読んでいる方がいたらすいません。こっちが本当です。

12話 復讐者（前書き）

善意ある行動が必ずしも善意に繋がるわけではない。

12話 復讐者

今朝の訓練が終わると僕達FWに一日休みを貰った。その時、僕は自分の頬を抓って、これが夢ではない事を実感した。

「着替えるか」

自室で着替えるが私服は数着しか持っていないのですぐに終わる。携帯の電話帳からノイさんに掛けてみる。出るかなあの忙しいから。

『よーどうした、しゅーたん』

「すいませんが今日の午後1ぐらいにクラナガンの駅の近くで会えませんかね？」

『1時ねえ、2時半ぐらいならどうだ？』

「別に構いません。では2時半に」

『おう。にしてもどうしたんだ急に？』

「いえ、少し会って聞きたい事がありました」

『そうか。じゃあまた』

「はい」

僕が住んでいる。灯影荘とんえいそうはそれぞれ三部屋ずつの二階建ての六畳の部屋が2つのアパートである。旧暦の頃から在るらしく、かなり

ボロい。

「ん、シューマじゃないか。どうしたんだ？ 確か仕事で一年ぐらい帰って来ないんじゃない？」

キセルを加えて階段に座っているのはイード・ライシュ、24歳のアパートの大家兼フリーター。長い黒髪のポニーテールで普段着が和服で見た目はサムライウーマンだからといって剣術が出来るわけでない。

「お久しぶりです。イードさん。今日は休みを貰えたので、それと人と会う約束をしてまして約束の時間まで暇なのでアパートの様子を見ようと」

「そうなのか。別に何も変わった事はないな。にしても管理局員も大変だよな。全然休みがない」

「市民の平和を守る仕事ですから」

何もなしか。うん、変化がなくてよかった。

「ふーん、お前は市民の平和を守る気はなさそうだが」

「そんなことはないですよ僕は何時でもみんなの平和を守るために毎日頑張っているんですよ」

まったくイードさんは僕の事をどんな風に見てんるんだ。

「その市民の平和を守る奴がこの前殺し屋と雑談していましたと言った記憶が私にはあるのだが」

そういえばそんなこともあったな。もう会話の内容は全然覚えてないけど、アイツも覚えてないだろう。本当に何をしゃべってたんだろう。

「なーにを言っているんですか。あ、あああれは奴を油断させるために」

一様棒読みで否定してみる。

「いや、棒読みで言われてもそれに私はお前に捕まえないのかつて聞いたら別に仕事でもないのに危険なことはしませよと言ってたよな」

「・・・言いましたっけ？」

それはまたつく覚えがない。この人が言うんだから言ったんだろうな。

「ああ確かに言ったな」

「あー嘘付いてすいません」

なんとなく謝つとく事にした。

「別に謝る事でもないだろ」

「そうですね。あ、他の人達はどうしてます」

「ロメロは大学、ミリーとキクは一緒に買い物だ」

ミリーさん相変わらずキクの奴を引っ張り回してるんだろ。まあ、その方がいいかもなアイツ普段から何もしてなさそうだし。

「そうですか。イードさんは一緒に買い物に行かなかったんですか？」

「ああ、アイツに付き合つと帰りが何時になるからわからんからな」

「確かにそうですね」

僕も荷物持ちとして連れて行かれて、酷い目にあつた。

「僕はこれから自分の部屋の様子を見てきます」

「そうか。じゃあ私は茶でも飲みに行くか」

「そうですか。では気をつけて」

「お前もな」

そう言つて一階の自分の部屋に戻るイードさん多分、財布でも取りに行つたのだろ。僕は階段を登り、二階の一番端に自分の部屋の鍵を開けて中に入ってみると中は僕の予想とは違って綺麗だつた。かなり部屋を空けていたので埃まみれになっていると思つたのに部屋を見てみると丸テーブルの上に置き手紙があつた。そこには、女の子らしい丸い字でキクちゃんがシューマ君の部屋を週に一回ぐらい掃除してたから今度会つたらお礼を言つときなさいよハート！PSシューマ君らぶー。

「らぶー」

ここにはいないミリーさんに返答してみた。別に掃除なんかなくてもいいのにそう思いながら右腕の人工肌を触ってみる。この肌の裏に機械の腕があるのは少し不思議だ後、臓器のいくつかも人工物だが。んーまだ気にしてるのかな僕の体をジュエルシードを使ってキクに移植した事を。けど、そのことで気にすることはない。だって僕がアイツを助けたのはそれが双子の妹の姿が重なって見えただけで、もし見た目の年齢が僕と近くなければ助けなかったと思うから。

「そろそろ行くか」

鍵を掛けて階段を下りて待ち合わせの場所まで行く上を見上げると空は晴れている。

歩きながら進んでいるとキャロちゃんから通信があった。レリックを持っている意識不明の女の子を発見した。そこに空と地下からガジェットが出現してきたらしく、FWは地下のガジェットの迎撃を任せれたのだが、僕だけはまだ現場に到着していない。現場から灯影荘までの距離がかなりあるのだ。だから今はジャケットを装備して体を強化して現場まで急行している。これだと今日は会えないからメールするか。仕事が入ったので今日は会えそうにありません。こちらから誘っておいて申し訳ありません。と送信すると同時に何物かがこちらに接近してきた。そいつはフードを被っていて顔が見えなかった。

「!？」

蹴らた？攻撃のモーションが全然見えなかった。頭を上げるとさっ

きいた場所から10メートルは離れている。そこは襲撃した人物がいる。

僕は「何者だ？」と叫んだ。

「復讐者だ」

12話 復讐者（後書き）

12話どうでしたか？どうも、火火火です。

今回はオリキャラがたくさん出てきましたが、多分すべてのキャラは出て来ないと思います。ではまた次回の後書きで。

13話 もう1人の魔迅眼保持者（前書き）

最高を想像しながら生きるのと、最悪を想像しながら生きるのどっちがいいですか？

13話 もう1人の魔迅眼保持者

父親は嫌いだ。理由は家族の中で一番先に死んだ事と、彼が戦王の正統後継者であり、僕にもその血が流れている事である。彼の父親という理由で僕は何度か命を落としそうなたし、誘拐もされた。まったくいいことなんて一つもない。今いる復讐者と名乗る人も僕が戦王の血を受け継いでいることは知っているのだろう。公では死んでいる事になっているのに。だから僕はこう聞いたのだ。

「君は何の恨みがあるの？」

「ん、どうして攻撃したのではなく、何の恨みがあるのかねえ。じや、君を殺す俺を覚えてもらうためにまずは自己紹介から、名前はチェン・トゥーノ、意味は101番目の実験体、歳は14お前と同じ年だと思うよ。好きな食べ物ジャンクフード、嫌いな食べ物は納豆あれは臭いよね食べている人の気がしれないよね。はい自己紹介終了。次は俺の素顔をどうぞ」

そう言い終わるとフードを脱ぐと、白を基調としたバリアジャケットと刀型のデバイス持っていたがそんなことはどうでもよかった。それより僕は驚愕したその顔は僕の記憶が正しければ兄のシルク・D・バイベルトに似ているというか本人と見分けがつかない。生きていた？それともクローンか。いや、変身魔法なのか。それともソツクリさん？

「ドクターが俺の顔を見たら大概の局員の連中、特にお前は驚くだろうって言うってたけど、その様子を見るとどうやら本当らしな。先に言っとくけど、ソツクリさんでも変身魔法でも実は生きてまし

たつて事じゃないよ。ここまで言えば解ると思うけど」

なるほど。僕が先ほど挙げた選択肢の中から残っているのは。

「・・・クローンか」

「正解。プロジェクトFによつて造られた偽の戦王、プロジェクトネームはreplika battle king、通称RBKの538人中の101番目にして唯一の成功体、チエン・トゥーノ。戦王を血を引いているという理不尽な理由でお前をボコボコにして殺す復讐者です。ちゃんと脳みそに刻みこめましたか本物ツ！」

相当キレてるな。クソみたいな人生を歩んできたんだろうな。・・・ハア、年に二回も戦王絡みがあるなんて何処で情報が漏れているんだ。兄のクローンねえ。まあ、誰かが造っていてもおかしくはないよな。何故なら兄は管理局では最強とまで言われた人らしい。

「どうせそんなのすぐに忘れる。お前みたいな奴はたくさんいたから」

ホルスターから二本のデバイスを取り出す。殺されるのはいやなので抵抗してみよと頑張るか。あー面倒だ。

「お前相当な人間に逆恨みさてたんだな。まあ、いいや。覚悟しろよ。テメエーと同じを眼を見せてやる」

すると奴の瞳が金色のベル力式に変わったその瞳を知っている人ならそれを魔迅眼と呼ぶ。クローン技術で再現できたんだな。

「本物ツ！お前ならこの瞳の能力はよく知ってるだろう」

「ある程度は」

魔迅眼の能力は、自分の魔法の発動を早くする事だ。そうすることで高速戦闘ができるらしい。ノイさん談より。

「そうかい。じゃあ行くか」

チエンは居合の構えをして、それを抜いた瞬間。

「ッ!？」

右手が切断された!？

「手始めに腕の一本でも切ろうと思ったのに、機械の腕かよそれじゃあ痛くないだろうな」

ふざけるな。神経が繋がってるから痛いんだよ。くそ、影丸が落ちた。

「次は残りの左腕を切り落とすか。あ、もしかしてそっちも機械だったりする?」

また居合の構え戦刀に魔力を込めて魔力の刃を造り出す。アイツの居合は確かに早いが、真っ直ぐに突っ込んでくるからカウンターを取りやすい。

「よし。二回目行きますよー」

アイツが刀を抜くと同時にこっちもそれに対応して攻撃をするがそ

れは当たらず、僕の腹に刀が刺さっていた。

「グオオ!？」

「さすがは本物、お前の攻撃を避けたから、腕は切り落とせなかったな。でも今のお前は俺と同じ眼は持つてないし、こっちに雷の魔力資質変化もあるから、絶対に勝てないけどな」

「・・・ど、どうして高速で動いているのに反応することが？」

「あーん、別に知らなくてもいいんじゃない。今度こそは左腕を落とすか」

「ガハッ」

刀を僕の腹から抜いて、刀を振り上げた。あーヤバいどうしょ。このままだと死んだな。こっちが魔迅眼を使っても死んだな。

「アクセルシュータツ!」

チエンの横から複数の桃色のスフィアが来たが、奴はそれを簡単に回避した。

「シューマ、大丈夫？」

「な、なのはさん？」

僕の前、つまり、奴の後ろの空中にいつもと違うバリアジャケットのなのはさんがいた。

「あなたを殺人未遂の容疑者として拘束します」

（シューマ、私があの人と戦うからその隙に逃げられる？）

なのはさんからの念話か。

（なのはさん、あなたでも多分、勝てません。奴の目的は僕1人です。だから僕1人が死ねばそれで終わります）

（何を馬鹿な事を言ってるの？いいから私に任せて）

（ちょ、なのはさん？）

くそ念話を切りやがった。まずい、ここままだとなのはさんは殺される。

「・・・さてとどっちから殺そうか考えてたが、やっぱり邪魔して来た方にするか。本物、テメエを庇ってまた人が死ぬ様をしっかりと目に焼き付けろよ」

・・・まただと、こいつもしかしてあの事までも知ってるのか？アイツがなのはさんの方を向くとなのはさんが驚愕していた。

「・・・うそ、どうしてここにシルク君が。死んだはずじゃ？」

「あ、何だこいつ誰かと勘違いしてないか。俺はクローンだよ」

「・・・クローン？」

なのはさんのあの様子からすると兄と知り合いなのか？

「ま、いいか。殺そう」

居合の構えに入った。ヤバいなのはさんは動揺してるし、あんなんで攻撃が防げるのか？

すると隕石でも落ちたかのようにドン！と音がした。それに対して僕を含めた三人は音がした場所を向いた。そこには黒いキャリアスーツを着ている自・他共に最強と認めるノイさんがいた。

「まったく、私との約束をボイコットしやがってこの落とし前はどうしてくれるんだ。ええ、しゅーたんよお」

「・・・ノイさん、どうして？」

「どうしてだあ、そんなの決まってるじゃないかお前を助けに来たんだよ」

「いや、そういうことではなく、どうしてこの場所が？」

「来るのが遅いんで連絡しようとしたらメールで仕事が入ったので無理ですって来たから、じゃあ文句のメールでもしてやろうとかと思ったら、何か街で派手な音が聞こえるからしゅーたんが大丈夫かなって心配して魔力サーチでお前を探して来たんだよ。それより、少し寝てなしゅーたん。」

「・・・あ、はい」

そうだな少し寝よう色々あって疲れた。あーこのままずっと寝ていたいなー。

13話 もう1人の魔迅眼保持者（後書き）

えーどうでしたかね13話？

多分うまく伝わってないと思います。もし変なところがあったら感想に書いてくれると嬉しいです。
ではまた次回の後書きで。

14話 黙秘権なし（前書き）

人はみんな多面的である事を忘れない方がいい。

14話 黙秘権なし

どうして私とお母さんを見殺しにしたの？ねえ、兄ちゃん。どうして？何で私が死にそうになった時に何もしないで助けくれなかったの？ねえ、何で？ねえ、どうして？

偶に夢で死んだ時と同じように虐待されて傷だらけの体の妹が僕に何度も問いかけてくる。それに対して僕は、何も答える事ができない。多分、何を答えても言い訳にしかない。

「・・・死にてえー」

眼が覚めた。・・・ここは何処だ？周りを見る限り、病院みたいだが。あ、切り落とされた右腕は付いてるが、まだうまく神経が繋がってないみたいだな。その証拠に右手の指がちゃんと動かない。

（シューマ、起きてる？）

念話、なのはさんからか。

（ええ、起きてますよ）

（よかった。意識が戻ったんだね。今、動ける？）

（大丈夫ですよ。何かあったんですか？）

（この前の事件でキャロが発見したレツリクのケースを持った女の子がこの病院で入院してたんだけど、何処かに行つたみたいで探して欲しいの）

確か金髪の5、6歳の女の子でオッドアイだったかで人造魔導師か。・・・誰が造ったのだろうか。まあ、解る事は造った奴の頭は相当イカれてる事だけだな。

（わかりました）

（ありがとう。シューマは外を探して。もし見つかったら私がフェイト隊長に連絡して）

（了解）

じゃ、探しに行きますか。

（あ、それと僕があの時、気を失った後どうなりましたか？）

まあ、ノイさんが勝って終わりだと思うけど。

（あの後、突然来た人ノイさんでいいのかな？）

（はい）

さてと外に出て何処から探すか。まあ、適当に回るか。

（そのノイさんがチェン・つてが戦つてというよりほとんどノイさんが一方的に攻撃してばかりで決着はすぐに着くと思ったんだけど、仲間の戦闘機人と一緒に逃げられたの）

（そうですか。その後、ノイさんはどうしましたか？）

ノイさんから逃れることができる奴なんていたのか。

（私が誰かのなか聞いて、しゅーたんの事を頼んだって言って何処かに行ったけど。私は戦闘を直接見たけど、あの魔迅眼が相手なのに苦戦するどころか圧倒する事ができるなんて思わなかった。あれがシューマの言ってた最強の人？）

（ええ、そうです）

（そうなんだ。確かに私じゃ絶対に勝てないね。それじゃあ見つかったら連絡してね）

（はい）

見つからねえー。キャロちゃんが見つけた時にはかなりボロボロらしかったらしいけど、絶対にあの時は逃亡してただろう。この分だと見つかったも素直に言う事聞いてくれるか怪しいな。

「あ、」

木の後ろから探していた女の子を発見した。何故か知らないけど、うさぎのぬいぐるみを持っていた実はあのぬいぐるみはデバイスかもしれない。そんなわけないか。なのはさんに連絡しよ。

（あ、なのはさん見つけましたよ）

（本当！？すぐにそっちに行くから。今、何処にいるか教えて？）

（中庭です。多分、すぐ近くですよ）

（わかった。シューマはその子が逃げないように見張ってね）

え、僕、小さい子供嫌いなんだけど。どうしょ。

「ひっ!？」

・・・何か怖がっているのですか。僕、何かしたのだろうか?ああ、時間が長く感じるなのはさん早く来て。

「・・・えっと、アメいる？」

持っていないけどな。でもこんなの普通は信じないだろ。まあ、時間が稼げればそれでいいや。

「いつ、いい・・・し、死んだような目の人に貰いたくない」

「・・・え、あーそう」

こんなに小さい子に言われるとかなり傷つく。

「シューマ!」

「なのはさん」

よかった。早く来てくれて本当に。

「見つかってよかった。心配したんだよ」

優しい声でしゃべるのはさん。こいつのは年上に任せよう。僕じや無理だ。

後ろの窓からいきなり女性が飛んできた。その人は女の子にトンフアーみたいなデバイスを構えてた敵意むき出しにしていた。敵か？僕もそれに対応して、女性に向けて影丸左手に持って構える。

「ちょ、何を」

「いや、そんな小さな女の子にいきなりデバイスを向けるのはどうかと思ひまして。それとあなたは誰ですか？」

「あつ、あ、・・・あ、あ」

無茶苦茶怯えてるなこの子。当たり前かいきなりデバイスを突きつけられたんだから。

「シスターシャッハ、ちょっと、よろしいでしょうか？後、シューマはデバイスをしまつて」

トンファアの人の名前はシャッハというらし。どうでもいい情報をゲットした。

「あの、はあ」

「了解」

「ごめんね。ビックリさせちゃったよね。お名前言える？」

「ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオ か。いい名前だね。ヴィヴィオ 何処に行きたいの？」

「あれ、どうしたの？」

「フェイトさん。いや、なのはさんがあの子と仲良くなって」

「そうなんだ」

すごいな。簡単に仲良くなっていく。子供の扱いに慣れてるのか。

「ママ、いないの」

「あつ、ああそれは大変、じゃあ一緒に探そうか」

悲しそうな顔をしてもすぐに表情を変えるなのはさん。多分、なのはさんもその子にはちゃんとした母親がいないと分かっているのだろう。だから悲しそうな顔になった。

「・・・うん」

ヴィヴィオちゃんとなのはさんは一緒に中庭を歩いて行った。右に曲ったのでだんだん2人の姿が見えなくなっていく。

もしあの子は自分には母親がいないと分かっただらどうなるのだろう。そんな事考えるのはやめよ憂鬱になるだけだ。

「じゃ、行こうかシューマ」

「何処かに行くのですか？フェイトさん」

「・・・そういえば、まだシューマには話してなかったね。シューマにはこれから聖王教会の教会騎士団所属の騎士、カリム・グラシ

ア少将と時空管理局所属のクロノ・ハラOWN提督と私となのは、
はやてと一緒に話す事があるから」

「・・・あの時のことですか」

「うん、私もなのはから聞いてビックリしたし、私となのは、はや
ても聞きたい事があるからね。今まで戦王だった言わなかったのは
話したくないことがあるかもしれないけど、話してもらおうよ」

黙秘権はないみたいだな。あーくそ面倒だ。

「あ、ハラOWN提督って、フェイトさんと同じですね」

「うん、クロノは私の兄なんだ」

「あーそうですか」

自分から話を振っというて何だけど、どうでもいいわそんなこと。脱
走してもすぐに捕まりそうだよなあ。

14話 黙秘権なし（後書き）

14話どうでしたか？どうも火火火です。

えー特に書くこともないのでこれで今回の後書きは終わります。ではまた次回、感想があると嬉しいです。

15話 頼み事（前書き）

結局は他人事。

15話 頼み事

テーブルがありそこには、なのはさん、フェイトさんにはやてさん、後、金髪に紫色のカチューシャをしている女性と管理局の制服を着ている男性、そして僕が座っている。長い話しになりそうだ。

「シューマさんは私とクロノ提督の事は知りませんよね？」

「フェイトさんから説明をしてもらったので大丈夫です」

「そうですか。ではこれからいくつか質問させてもらいます。単刀直入に聞きますが貴方はエグリア・D・バイベルトの息子ですね？」

もう知っているくせにいちいち聞いてきやがって嫌がらせか。それに僕は質問に答えるなんて了承してないぞ。

「・・・はい」

「どうして公では死んでいる事にしたのですか？」

同じ事を体験しないと他人の事はわからないって確かマンガのキャラも言ってたな。

「戦王の子孫として生きていくのが嫌だからです」

父親も兄も戦王として管理局で働いてきた。その結果、局では英雄扱い、そのせいで危険な仕事をする事が多かった。そして2人とも仕事中に死んだ。父親の方は僕が物心が付く前に死んだので父親がいない事にはあまり違和感を持たなかった。兄が死んだ時には自分

も将来は管理局員になって兄と同じように危険な仕事に就いて、仕事中に死ぬのかと思ったたら怖くなった。それに戦王は沢山の人を助けたが、多分、それと同じぐらいの人を不幸にしてきた間接的に直接的に。これは局の仕事やノイさんと一緒に行動して分かってきた事だ。そのお陰で母親も妹も死んで、僕は今まで多くの人に恨まれ、復讐され、殺されかけて、軽蔑され、暴力を受け、憎まれ、恐れられ、尊敬され、崇められ、頼られ、信頼され、裏切られ、それが死ぬまで続く。今の僕に眼が使えるかはまったく関係なく。

「貴方はエグリア・D・バイベルトと同じ戦王の正統後継者の証である右目の金色の瞳はどうしたんですか？」

他の人達が何も驚いたりしないところを見るとみんな正統後継者に必要な証の事は知ってるってのか。じゃあ、兄は正統後継者ではない事も。これだともう一つの眼の事も知ってそうだな。

「黒のコンタクトで隠してました」

そう言つて、左手で右目のコンタクトを外すと、みんな驚いているみたいだ。

「では、6年前に本当は何があつたのですか？」

「妹は死んで僕は生き残りました」

「それはあたなが生きているから分かっています。聞きたいのはどうして妹さんだけ死んだのかということです」

「・・・答えるつもりはありません」

あんな事を思い出しながらしゃべるなんて死んでもいやだね。

「……どうしてですか？」

ああ、少し空気が重くなったな。さてと、どうなるかな。……どうなるかなって、自分の事なのに他人事みたいなセリフだね。

「他人に話すのが嫌だからです」

「そうですか。私は分かりました無理に聞こうとは思いません。では、あの先日の事件で襲撃してきた人物、チェン・トゥーノについて何か知っている事はありませんか？」

おや、別に咎められなかったな。まあ、別にあの事件なんてこれからのことに何の意味もないからな。ん。今、私はって言ったよなじや他の人は違うのか？

「そもそもあの時が始めて会ったので何も知りません。むしろそっちの方が何か知ってるのでは？」

「……そうですね。チェン・トゥーノは自分はプロジェクトFによつて造り出されたと言っていましたね」

「そんな事も言っていましたね」

「そのプロジェクトFについてですが「騎士カリムその事については私から説明します」

話の途中で割って入ってきたフェイトさん。

「シューマ、プロジェクトFは生命操作技術の一つで、ジェイル・スカリエッティが構築した基礎理論を私の母さん、今はもういないんだけど、プレシア・テスタロッサが发展させ完成させたものでね。クローニングした素体に記憶を定着させる事により、従来の技術では考えられない程の知識や行動力を最初から与える事が出来るの。その最大の目的は、元となった人物の肉体と記憶の複製。けど、元となった人物の完全再現だけはどうやっても叶わないらしい。これがプロジェクトFについての大体の説明」

僕はジェイル・スカリエッティとフェイトさんの母親の所為で殺されたわけだな。そんなことをこの場で言った暁にはみなさんの怒りを買う事になるだろう。だから言わない事にしよう。

「だから、兄にソックリだったんですね。後、チェン・トゥーノはジェイル・スカリエッティと繋がりあるのでしょうか？」

「私となのはちゃんとフェイトちゃんと話し合ったけど、その可能性は高いと思う。だからガジェットや召喚師の一味、戦闘機人と一緒に出てきたしな」

まあ、はやてさんの言うとうりそうなんだろ。

「シューマ、映像の記録だと、シューマを襲撃して来た人物は復讐者って言ってたけどこれってどうして？」

分からないのか？なのはさん。

「僕の推測ですが、奴はクローンですよ基本的に造られたクローンは酷いな扱いを受けてます。そんな扱いを造った原因である家族の僕を殺したいほどに復讐したいと思うのが普通だと思います」

「でもシューマがそんなことで殺されるなんて」

「確かに理不尽な理由ですけどなのはさん。奴は自分で理不尽な理由で殺すって言ってました。自分でも分かっているんですよそれでも憎しみの方が大きいんでしょうね」

「だからって人を殺していい理由にはならないだろ」

人を殺すのにいい理由もクソありませんよクロノさん。そういえばフェイトさんにはミドルネームがあるのにクロノさんにはないな。養子なのかフェイトさん母親いないって言ってたしするとフェイトさんは義妹？

「それよりこれはかなり重要な事ですが、フェイトさんはクロノさんの義妹きまいですよね？」

「重要かどうかは知らないが、確かにフェイトは僕の義妹きまいだが」

おお本当に義妹だ始めて見た二次元だけの産物だと思ってたのに。しかも美人。

「僕には妹はいましたが、義妹はいませんでした」

「知っているよ。シルクは僕の友人だし、君の妹の話はシルクから何度も聞かされた。アイツはかなりのシスコンだった」

へえーそうなんだ。兄の事をあまり知らないから何か新鮮だな。

「クロノさんもシスコンですよね」

「何で君の中で僕がシスコンって事になっているんだ」

「・・・えっ!？」

ウソだろそんな馬鹿な事がありえない。この人は本当に男か？

「何で今日一番の驚きがここなんだ!」

「こんな美人が妹なのにシスコンじゃないなんて。兄としてどうな
んですかそれは!」

「兄がどうか関係ないだろ!」

「あのクロノ提督、シューマさん話が脱線してきているのでそのへ
んで」

「すいません。騎士カリム」

確かに話は脱線したが、これは重要なことではないのか？クロノさ
んがシスコンではない事は。まあいいや僕も謝るところ。

「すいませんでした」

「では、話を続けますね。シューマさんあなたには魔迅眼を完璧に
開眼してもらうために訓練をして欲しいのです」

「・・・はい?」

15話 頼み事（後書き）

どーも火火火です。15話どうでした？

えー皆様はシューマが嫌な奴と感^じるている方がい^いれば嬉しいです。シューマは嫌なキャラでこそ彼なので。

ではまた次回の後書きで。

16話 決断（前書き）

誰かが不幸になれば、誰かも不幸になる。

16話 決断

ハア！？何を言ってるんだカリムさん。僕に魔迅眼を使いこなせるようになれだと、ふざけるなよ。僕はもう戦王には戻らない。

「嫌です。絶対にやりません」

僕の発言でみんなの空気が重くなるのが分かる。でも今はそんなことは知った事ではない今のままでも僕は色々な感情を持つ人たちに苦勞して来たのに、眼を完璧に開眼させて、もっと辛い目に会うのは嫌だね。

「そうですか。・・・この手は使いたくなかったのですが」

何か、僕を従わせる事ができるワイルドカードもあるのか？

「何か、あるんか？カリム」

「・・・言つのですか？騎士カリム」

「ええ、シューマさん貴方が住んでいる灯影荘にはキクさんという方の体内にはレリックがありますね？」

それを聞いたと同時に僕は席を立ててカリムさんに戦刀を向けた。なのはさん、フェイトさん、はやてさんは驚愕している。それにクロノさんも。

「・・・何時、その事が分かった？」

「やはり本当だったのですね」

デバイスを向けられても全く動揺してない。

「いいから答えろっ!!」

自然と魔迅眼が発眼して、魔力の刃で戦刀の刀身を伸ばすが、なのはさんとフェイトさんがデバイスをこちらに向けてそれを止めに入ってくる。

「シューマ、何やってるの!?!」

「どしていきなり?」

2人が何かを言っているがどうでもよかった。

「おい、答えろっ!」

「その前にデバイスを下げてください」

「分かりました」

これだといくら脅しても答ええないな。デバイスをしまい、席に座る不満が残るが、言う通りにしないと話が進まないからな。僕が席に座るのを確認してからなのはさんとフェイトさんもデバイスをしまい、席に着く。魔迅眼はもう消えていた。

「先程は分をわきまえない行為失礼しました。処分をいか様にでも少将殿」

「いいえ、構いません。それに貴方はそんなことは思っていないませんか？」

「そのようなことは」

「嘘ですね」

「はい、嘘です」

もういいや下手に出るのはやめよう。

「で、アイツの体にレリックがあることが分かって、貴方は何をするつもりですか？」

「もし、貴方が戦王として管理局員にならなければ、キクさんを局で危険人物として保護させていただきます」

この野郎っ！確かに体にロストログアがあれば、局が保護する十全な理由になる。はやてさんの知り合いであるなら、非人間的な所で保護はさせないと信じたいが、もしそんな所に入れられたら、アイツはまた前と同じ生活に逆戻りだ。それにレリックを抜かれたらアイツは死ぬ。

「分かりました。少し考える時間を貰ってもいいですか？」

「最後に聞きますがどうして貴方は戦王と分かるかもしれない可能性があるのに局員になったのですか？」

「それ以外に生きていく方法を知らないからです」

そつだ。あの時は選択肢が特になかったらな局員になるつと思つたんだ。

「そうですか」

「僕からもいいですか？」

「答えられる範囲ならば」

「僕が戦王の子孫だから六課に転属させたんですか？はやてさんの上司である貴方だったら僕に命令できるから」

「始めは確証はありませんでしたが、私の義弟の査察官に貴方の経歴などを調べて分かつてきました」

なるほど、優秀な査察官だ。

「これは貴方には言い訳にしか聞こえないでしょうか。万年人員不足で、特に優秀な魔導師や騎士が少ない事はわかりますね」

「だから、僕を無理やり戦王として局員にさせよう？」

「そうです。では、考えが決まったら私かはやて、隊長達に報告してください」

「分かりました。では自分はこれで」

「ちょっと待つてシューマ」

そつ言つて席を立とうとするとなのはさんに呼ばれた。

「何ですか？」

「6年前に何があつたのか教えて」

隣にいるはやてさんやフエイトさんもなのはさんと同じように真剣な目だ。これは下手に嘘を言うと後々、厄介になりそうだな。

「ミットの市内にある病院で精神科のユリカ・ファードラさんに聞けは詳しいことがわかりますよ」

また他人任せでいいや。

「そう。自分から言わないんだね」

「・・・なのはさんだってティアナさんとあれこれあつた時に自分から自分のことを言わなかったでしょ」

「確かにそうだね」

「じゃ、僕はこれで」

翌日、ベットの上で昼食を食っているが病院食なので味が薄くておいしくない。右手はまだうまく動かないこんな時に両利きでよかつたなと思う。ちなみに昨日の話し合いの時にカリムに手を上げたの所為で監視をするために個室になった。

あーどうしょ？戦王には戻りたくないし、でもそれを断つたらキクは局に保護される。客観的に見れば、僕が要件を飲めばいいのだが、それを了承したら僕はさらに不幸な人生になることは容易に想像できる。

病室のドアを叩く音がした誰だろう。

「どうぞ」

ドアが開くとキクとがいた。キク、ノイさんに無理やり連れて行かれた管理外世界の研究施設で実験体として連れて来られた灰色のセミロングに紫色の瞳の少女、身長は僕より少し小さい。

「よ、どうした？キク」

キクが僕を見ていきなり抱きついてきた少し痛い。後、少し胸が。

「・・・よ、かたった。本当に、無事でよかった・・・よかった」

泣いている。こいつが泣いたのはこれで2回目だ。1回目はジュエルシードを使って僕の体の一部を移植させてこいつが移植後に目を覚ました時だった。その時は死んだと自分で思ってたのに生きていたのが嫌だったんだろうな。

いつも見て思うが、こいつの右腕の肌の色は他の部分に比べて少し違う僕の右腕だから当たり前だけど、罪悪感を覚えるな。

「なあ、そろそろ離して・・・」

「・・・また前みたいになってなくてよかった」

抱きしめる力が強くなって爪も喰い込んでいる。こんな時に気の効いたセリフでも言えればいいのだが、僕にはそんなことは考える事はできない。

「・・・大丈夫だから」

だから今の僕にはこんなことしか言えない。

「本当に大丈夫だから」

何が大丈夫なのか知らないが、体かな？心の方は人として終わってるけどな。・・・さてと今考えたのだが、こいつが局に保護されずに生活し、僕が戦王にならない方法はこれしか思いつかないな。

「・・・入るタイミング間違えたかな」

ドアの前には無表情のイードさんがいた。

「え、・・・あのごめん」

顔を真っ赤にして僕から離れながら謝るキク。

「あーうん、別に。イードさんどうしてここに？」

「ここに来る途中でトイレに行きたくなったから、キクに先に行つてろって言ったんだ」

「そうですか」

最悪だあー！ど、どうすれこの場の空気を変えられる考えろ。

「・・・ゼリー食べます？イードさん」

病院食のゼリーを差し出すこれで場の雰囲気を変えられるか！？

「いや、別にいいや。それよりここまで来るの予想以上に金が掛かってな帰りの運賃がないから金貸してくれ」

「あ、いいですよ。後で一階のＡＴＭで金を降ろしてきます」

「すまないな。あ、これ見舞いのフルーツお前、食べて大丈夫か？」

「大丈夫ですよ」

そろそろ言つかないかな。こいつはどんな反応をするのだろうか？

「あのさキク聞いて欲しいことがあるんだけど」

「何？」

カリムさんに僕が戦王になればキクを局で保護することを話した。

「で、シューマお前はどつするつもりだ？」

「もう考えは決まってますイードさん」

この結論でいいだろ。僕にはお前を守ることはできない。

「お前はノイさんと一緒に逃げろ」

16話 決断（後書き）

今回は書くのに時間がかかりました。

どうでしたかね？後、このままだと30話以内に終わることは確実です。いや、下手したら25話以内に終わるかもしれません。

こんなに早く終わっていいのかと疑問に思ってきました。

ではまた次回。

17話 前へ（前書き）

現状維持の先は崩壊。

17話 前へ

「え、どうして？」

「どうしてって、お前このままじゃ局に保護されるだよ。ノイさんと一緒にいれは捕まる心配はないだろ」

「でも・・・」

何でお前は。

「確かに僕が戦王として局員になればいいけど、知ってるだろ。僕が戦王になりたくない理由。それに僕みたいなヤツがお前を守ることはなんかできるわけないだろ」

「うん。・・・わ、分かった。シュ、シューマ、の言う通り、にすら」

何でそんな悲しい顔で泣くんだよお前。これでお前は僕に一生会わなくていいんだぞ。お前をそんな人から外れた体にした僕に。

「あ、あの、ね。私、ちょっとトイレに行ってくる」

何なんだよ一体。でもいいんだよこれで。僕に誰かを守ることができないのは実証済みだろ。だって僕はがんばっても友達1人も助けられないダメな人間なんだからさ。分かってるだろ自分ってか分かれよ。

「おい、シューマ！」

イードさんこっちに来て僕の服の胸倉を掴み上げる。何だよ何に怒ってるんだよ。

「何ですか？」

「何ですか、じゃないだろっ！どうしてお前がアイツを守ろうとしない！」

「何でって、さっき言ったじゃないですか。僕はもう・・・いやすでに逃げることを選んでいるんですよ。また誰かが死ぬのが怖いから」

そうだよ。怖くて、僕は逃げるんだよ。今からもこれからも。キクから家族から過去から自分から戦王から逃げるんだよ。

「それにアイツは僕のことを恨んでいますよ。どうして私の体にシユーマの体の一部があるのかって」

普通に考えてみる。右腕が他の肌の色と違うんだぞ。そんなの嫌に決まっている。周りから軽蔑、気味が悪いと思われ、見下され、そんな視線を感じたら憎しみが生まれる。それはその原因を造った僕に来るのが当たり前だ。今まで僕に罵倒の1つも言わないのが不思議なぐらいだ。

「何時、アイツがお前にそんなことを言った」

イードさんは手を離し、今度は僕の頭を片手で掴んでベットに叩きつける。アイツが言っただけでも分かるだろ。

「言ってますんよ。でも心の中では思ってますよ。それよりさっきから何です。痛いじゃないですかやめてくださいよ」

「ムカつくからやってんだよ」

そうだろうな瞳孔が開いてるし。

「そうですか。すいませんでした」

これでいいだろ謝ったんだから。だから離せよ。

「おい、どうしてお前が謝ってるんだ？」

知るかそんなの。

「僕が気に障ることしたからでしょ」

「そうだな。で、何が原因だと思う」

オイ、何って言うてるんだよさっきからわけが解らん。

「いい加減にしてくださいイードさん。僕が本気で貴方を殺そうと思つたら殺せるんですよ」

「そうか。そいつは驚きだなお前が直接誰かを殺せるなんて思つてもみなかったよ。じゃあ、殺されるかしないから言っておくが、キクはお前を決して憎んだりはしてない。これは断言してやる」

「何を根拠にそんなことを」

「根拠ならあるさアイツが話っていたからな。シューマが私を助けてくれて嬉しかったでも私は沢山迷惑をかけている。だから嫌だけどシューマと一緒にいたくないなら別れるって言ったんだよっ！」

・・・アイツがそんなことを。

「楽しかったんじゃないのか、嬉しかったんじゃないのか、幸せじゃなかったのか、一緒にいて！嫌じゃないのか、悲しくないのか、悔しくないのか、お前はキクがいなくなっ！」

「楽しかったし、嬉しかったし、幸せでしたよ一緒にいて。嫌ですよ！悲しいですよ！悔しいですよ！いなくなるのはでもそれ以上に怖いんですよ。また助けようとしてもどうせ助けることができないって思っているのが、どこかであきらめている自分が！」

「何度、助けることができないからってお前があきらめていい理由にはならないだろっ！お前は私と違って魔法が使えるし、お前にはアイツを助けられる才能があるだろ！お前は自分が何やっててもできないって決め付けて停止してるんだよ。いいか停止したらその先は崩壊だ。それが嫌だったら動け、前へ進め！お前がやりことをやれ！」

いいのだろうか、僕はまだ守りたい何かを守っても。誰かが僕の所為で死んでも何度でも這い上がってもいいのだろうか。

「僕はまた誰かを助けもいいんでしょうか？」

「当たり前だ！」

なんて嬉しい言葉だ。僕にはまだ誰かを助けることをしてもいいん

だ。前に進んでもいいんだ。

「ありがとうございますイードさん。ちょっとキクのヤツ探して謝ってきます」

「おう、行つて来い」

「はい」

そうだ僕はアイツを守りたい。僕は何だかんだ言いながら楽しかったし、嬉しかったし、幸せだった。これは本当だ。
病室から走って探しに出つて、キクは中庭のベンチに座っていた。

「ハア、ハア、ハア、おい、キク」

「・・・え、しゅ、シューマ？」

驚いた表情でこっちを見るキク目が真っ赤になっている。泣いていたのだらう。

「ごめん。イードさんに言われるまで、何も気づいなかった。僕はお前がいないと嫌なんだってことが分かった。だから僕で良かったらお前を守らせてくれ！」

これが僕の今の気持ちだ。僕はお前に悲しい涙を流して欲しくない。

「わ、私もシューマと一緒にいたい。離ればなれになるなんて嫌だ！それに守ってもらうんじゃなくて私がシューマに助け欲しいの」

「分かった」

「うええええ、うええええええ、よ、よかった、本当によかった」

周りに関係なく泣きだしたキクに対して僕はできるだけ頭を優しく撫でた。今は自分で勝手に架した重荷がなくなった気がする。

「ああ、これでよかった」

その後、シャツハさんにカリムさんの面会を申し入れた。考えが決まったと言ったらすぐに会えますので少々、お待ちくださいと言われ今はカリムさんに会いに部屋までシャツハさんと歩いている。

「騎士カリム、シャツハです。シューマー等陸士を連れて来ました」

「どうぞ」

ドアの奥から返事が返ってくる。

「ではシューマー等陸士、失礼のないようにお願いします」

そう言って、ドアの前から離れていくシャツハさん。

「失礼します」

礼儀として敬礼を忘れずにする。あれ、これって右と左どっちでやるんだろ。適当に右でやったけど。これで合ってるのか。

「・・・決まったのですか？」

真剣な表情で僕に聞いてくるカリムさん。

「はい。カリム少将の条件を了承します」

「分かりました。ではケガが治ったら訓練に入ってもらいます。それから当分の間は集中してもらうために無人世界で訓練して下さい。逃亡したら分かってますよね」

キクのヤツを保護するんだろ信用ないな。

当たり前か。この人にデバイスを向けたんだから。普通だったら処罰が下ってもおかしくないしな。

「分かってます。そうなると訓練が終わるまでは六課に戻れないことになりましたが、その間の仕事はやらなくてもいいことになります。が宜しいのでしょうか？」

「そのことは心配しなくても大丈夫です」

なるほどね。そこまでしてするとはよほど、戦王として僕を局員に加えたいらしい。

「すいませんが、1つよろしいでしょうか？」

「何ですか？」

「魔迅眼を完璧に使えるように訓練するのは分かりましたが、どうやってやるんですか？」

正直僕は魔迅眼を完璧に使えるようになれる方法を知らない。そもそも戦王についてもあまり詳しく知らない。2つの眼が使えることと古代ベルカの王であったことぐらいだ。

「ああ、それなら大丈夫です。貴方の訓練を付ききりで指導してくれる人がいるのでその人に詳しく聞いてください」

なのはさんか？でも今の六課には必要な人だし、僕にそこまで構っている時間なんてないだろ。

「指導してくれる人って誰ですか？」

「ノイさんです」

「・・・はい？」

17話 前へ（後書き）

更新するのに時間がかかってすみません。
原因は他のヤツも書き始めて事です。えー次回はもっと早く更新で
きるように頑張ります。
ではまた

18話 空前絶後の強さ（前書き）

絶対に勝てる悪人を見つけると、人は正義になりたがる。

18話 空前絶後の強さ

ノイさんの強さを言葉で表すとしたら、空前絶後と言うのが適切であると思う。彼女ほど強いヤツはこの世の中にはいないし、そんなヤツは今後、生まれて来ない。

さて、僕が何故にこんなことを考えているのかというと、文化レベルが低い管理世界で訓練をしていて、ノイさんにどうすれば勝てるかを考えている間にどのぐらいの強さなのかを検討すると、それが空前絶後の強さであることに気が付いた。

つまり僕では、と言うよりは彼女に勝てるヤツなんていない。

「オラア！何処だシューたん！」

10メートル先いる彼女の魔力で強化した蹴りは、なのはさんのデイベインバスター以上に強力で木々を蹴散らし、その跡は大きなクレーターが出来ていた。恐ろしいすぎる。あんなのまともに喰らったら、死ぬ。絶対に死ぬ。

「よー、見つけたぜ」

あの人、絶対に楽しんでる。だって、うれしそうな顔してるもん。何が訓練だ！これはもうただの苛めだろ。

「逃げてないで来いよ。でないと訓練にならないだろ！」

・・・気付いたら、目の前にいた。移動したのが、まったく見えなかった。ノイさんが先ほどまでいた場所を見ると、足跡が深くめり込んでいた。次元が違いすぎる。天と地どころか、比べるのがアホらしい。こんなことで大丈夫なのだろうか。

以下回想。

「ノイさんが僕が戦王であることがばれる様に仕組んだんですか？」

僕とノイさんは訓練の場所に行くために臨港次元船にいる。

「いや。最初は聖王教会の方から、話を持ちかけられてな。お前が眼を使えるように協力してくれって、私としてはお前に強くなつて欲しいから、了承したんだよ。だから仕組んだというより協力したつて、感じかな」

珍しい。この人が少なからずであれ嫌っている管理局の提案に協力することなんてあるんだ。

「よく了承しましたね。管理局が嫌いなのに」

「お前、何か勘違いしてないか？私は局が嫌いだが、局の全てが嫌いなわけじゃない。クソみたいなことをしている連中が嫌いなんだ」

なるほどね。あれ、ノイさんが聖王教会に協力してるんだつたら、キクを逃がすように頼んでも意味ないよな。もし頼んだら、どうするつもりだったんだろ？

「僕、最初は提案の断ろうとしたんですけど、そうなった場合はキクが局に捕まるじゃないですか。だからキクをあなたに逃がしてもらおうと、頼むつもりだったんですが、頼んだらどうしたんですか？」

「ん。納得するまで怒鳴ったよ。お前、誰かに罵倒されたりするのは何とも思わないけど、自分の過去のことを言われたり、そのこと

について考え始めると、すぐに落ち込むだろ」

「まあ。そのとうりですね」

「でもよく立ち直れたな」

「人に助けてもらって」

「良かったな。その人のこと大切にしろよ」

「ええ。分かってますよ」

「これから訓練を始めるけど、眼を使いこなすためには、戦闘の経験値を上げるしかない。特に自分より強い奴と戦い方がいい。でもお前は真面目に戦うことはほとんどないだろ」

「言われてみればそうですね」

「だよなー。それに殺意がほとんどない。ってことは、勝つ気もほとんどない。これじゃ、眼を使いこなせない。だったら、戦いつている時は、戦いだけに集中できるように、殺意がないなら、殺意が出る様に、勝ちたい気持ちになればいい。そためにお前は私と本気で戦う。その方が手っ取り早い」

「でも、僕というより、ほとんどの人が本気になったあなたと戦っても勝負になりませんよ」

「安心しろ。本気でやるのはお前で、こっちは全開時の2、3割でやるから」

「ノイさんの2、3割って、魔導師ランクにすると？」

「んー。多分、Sぐらいかな」

Sって、絶対に勝てない。しかも、多分か。この人の多分は当てにならないから。

「・・・そうですか。話しを変えますけど、滞在期間はどのくらいですか？」

「お前が眼を使いこなせるようになるまで」

回想終了。

「1」のっ！」

目の前のノイさんに戦刀で切りかかる。

「お。やる気になったかのかな。でもそんな攻撃なんか当たたらねーよ」

簡単に避けられる。戦刀を持っている手首を掴まれて、前にブン投げられる。

「うお!？」

10メートルぐらい飛ばされた。体を魔力で強化してなかったら、ヤバかったな。にしても本当にSランクなのかよこの強さは。

「どうした？シューたん。もっと本気でやらないと、訓練の意味が

ないだろ」

「様、本気でやってるつもりなんですけど。」

18話 空前絶後の強さ（後書き）

一か月以上も更新せずにすいません。もう1つの方を更新したり、1週間ぐらいネットが繋がらなかったもので、出来ませんでした。でも、これからも更新が遅くなるなります。すいません。

19話 魔操眼（まそうがん）（前書き）

正義に対して精義できますか？

19話 魔操眼（まそうがん）

「う、う。体がすでにボロボロです。明日は休みにしましょうよ」

「ご飯にしようと、ノイさんが言ったので、今は仮宿で夕食の最中だ。メニューはカレーで、ノイさんは五杯目を食べている。」

「何を言ってるんだ。1日訓練して、1日休んでたら、何時まで経っても眼は使いこなせないぞ。それに最後の方の攻撃は良かったな」

「一撃も攻撃が入っていませんけどね。後、本当にSランクぐらいの強さでやっているんですか？」

「あれがSランクだったら、隊長や副隊長の強さもそれと同じぐらいなのか。流石は、エース。……恐ろしいな。」

「やってるよ。少しは私を信じろ。」

「信じてないから聞いてるんですよ。」

「そうだ。お前に渡しておくものがあつたんだ」

「そう言っつて、ノイさんは椅子の横にあつた90センチほどの太刀を取り出した。デバイスかな？」

「デバイスですか？」

「ああ、武器型のな。私の首にあるネックレスの補助・制御型のデバイスと同じで、第五世代デバイスだ」

後、インテリジェントデバイスだからと、言った。ノイさんの首にあるデバイスはロザリオで十字架の中央には小さいルビーが嵌めこんである。

しかし、ノイさんの胸はでかい。

「第五世代？すごいんですかそれ？」

「魔力無効状況でも魔力が使用でき、魔力が有効な状況ではさらに強化ができるって、言えば分かるか？」

「大体は……」

強そうなことだけは分かった。

「次の訓練からこれを使い」

ノイさんは柄の方を僕に向けて来たので、それを受け取る。今、気付いたが鐔つばの形がベルカ式の魔法陣に似て、三角形の形だ。

「このデバイス、僕の持っているヤツと同じ人が造ったんですか？」

「そうだ。私のデバイスもだ。ちなみに、そのデバイスの銘は、戦いくさがみのたち神ノ太刀」

「中二的なネーミングセンスですね」

僕と同じで。

「まあ、その辺はどうでもいいだろ。それにしてもそれすげえーぞ。

私の本気で魔力を込めて、使っても、折れないし、曲らない、壊れない」

それはすごい強度だな。前にこの人が思い切りアームデバイスを使ったら、一振りで壊れたからな。

「じゃ、30分ぐらい食休みしたら、訓練を再開するからな」

「……はい!？」

今日はもう訓練は終わったじゃ……。それに体がボロボロなんですけど。

「だから、訓練を再開するって言ったんだよ」

「でも外はもう真っ暗ですよ」

「完全に見えないわけじゃないだろ」

「そうですけど……」

やるつもりだこの人。何があろうと、絶対に訓練するつもりだ。

この訓練中に僕は、死ぬかもしれない。むしろ、その可能性の方が高い。

「男がネチネチ言うなよ。私が想定している訓練だと、少年誌の修業中の主人公みたいに、お前は訓練の最中に頭から血を流れて、服がボロボロになって、息を切らして、何かカッコイイことを言うつもりなんだからな。後、他の体中はケガして血が出てるのに鼻血は絶対にでない」

「頭から血を出して、バリアジャケットがボロボロになったけど、何も言う暇もなかったよ。あなたの所為で。それに鼻血はさっきの訓練でああなたのパンチが僕の鼻に当たって出ましたよ」

「だったら、今度から頑張れ」

「無理を言わないでください。僕も漫画はけっこう読むので言えた義理じゃないですけど、漫画の読み過ぎです」

「うるせーな。私はこの訓練中に私を超えられるのはお前しかいないって、言うつもりだから」

あたなはどここの忍者の先生ですか。

「そんなこと絶対は無理です。後、僕は自分を信じないヤツなんかに努力する資格はないの方が好きです」

あの話は僕の中では、感動すべき名シーンだ。それ見てたのが、電車の中でその時にあまりにも感動して、涙を流してたら、周りの人達の視線が痛かった。

「資格じゃなくて価値な。にしてもシューたんはそちの先生のセリフがいいのか。努力なんか面倒だと思っているヤツなのに」

あれ？そうだけ。僕より数多くの漫画を読んでいるノイさんが言うなら多分、そうなんだろ。

「まあ。感動しただけで、努力をしようとは思いません」

そつだ。いつもそつだ。思っただけで、行動しない。道具だけを揃えて、結局はないもしない。

二トとなる素質があるな僕は。……嫌な素質だな。

「お前はいつもでも思っただけで、行動はしないんだな」

「そつですね」

「でも今回は違つだろ。思つて、行動することに決めたのだろ」

「……ええ。そつです」

そつだ。あいつと一緒にいたいから、そのためには僕が強くなら
いといけない。

「そつだろ。休んだら、訓練を再開するぞ」

「はい」

あれから、1週間が経つた。ノイさんの戦闘は、なんとか勝負
になる程度になつたが、手加減されてるし、僕が負ける方が多い。
それに眼は、たまに出るが、自分の意思ではうまく出ない。

でも強くなつている気はする。

「よし。昼飯にするか」

「はあ、はあ。……は、はい」

疲れた。

「飯はカップ麺でいいか？」

「はあ、はあ。……ええ」

ノイさんはみそ味、僕はとんこつ味を選んだ。本当はみそ味にしようと思ったが、すごい形相で、それは私が食べるやだ、と、睨まれた。

相変わらず、大人げない。

「手加減した私と同じ土俵に立つことはできたけど、まだ眼は不安定か。後、1週間ぐらいしたら、眼は使いこなせそうだな」

「そうですか？」

「……でも、魔操眼まそうがんの方は、まだほど遠いな」

……魔操眼。自分の魔力を操ることができる眼。戦王の正統後継者のみが見えることできる。

「ですね。ノイさんの見立てだと、どのくらいかかると思いますか？」

「んー、先に魔迅眼ができるようならいと無理だからな。3週間ぐらいだと思うな」

「遠いですね」

「しょうがないだろ。魔法の基礎を真面目に学んでなんだから」

「ですよね」

ろくに基礎を学ばず、陸士訓練校に入学したからな。ああ、入学したのがもう4年前か。色々、苦勞したな。友達は1人も出来なかったけど。

「そうだよ。でも、私の予想よりずいぶん早いな」

「何がですか？」

「お前の成長が。訓練の初日によって分かったけど、キクを助けて時より強くなってた。確か……助けたのが2年前ぐらいだから、その2年間で何かあったのか？」

「多分、なのはさんの訓練のおかげですよ」

「なのはさん？ 誰だそれ？」

あれ？ あの時に会ったはずなのに。名前を聞かなかったのかな？

「ノ伊さんが僕を助けてくれた時に、一緒にいた茶髪のツインテールですよ」

「あー、お前が情けなく、ボコボコにされた時にいた。いい年して、ツインテールをしていた白いヤツか」

「……」

合ってるけどさ、失礼なことをつけ足さなくてもいいんじゃない。

「そうです。なのはさん、戦技教導官なんです」

「へー、お前をあれ程まで強くしたんだ。かなり洞察力の高いヤツなんだろ」

意外だな。10週で打ち切りなる漫画でもべた褒めすけど、人を褒めることがないノイさんが誰かを褒めるなんて。

「私ほどじゃないけど、体系もボン、キュン、ボンだし」

オヤジですか、あなたは。

「過大評価ですね」

「過大評価じゃない。事実だ」

さらに24日後、訓練も終わって、六課に戻ると隊舎が全焼してた。

19話 魔操眼（まそうがん）（後書き）

更新が遅いことは読者の皆様は多分、理解しているはずですよ。

今回で訓練は終わりです。眼が何時、使えるようになったとか、聞かないでください。いや、本当に。多分、気付いたら、使えるようになってたんです。

では、また次回。

20話 襲撃の後（前書き）

壊すことは簡単だが、元に戻るのには難しい。

20話 襲撃の後

とにかく驚いた。火事でもあった後みたいに六課の隊舎はボロボロだった。隊舎の方に近づいていと、そこには大量のガジェットの残骸、その現場を調べている沢山の局員。

ここに来るまでの臨港次元航の港での待合室のテレビでミッドの地上本部が何者かに襲撃されて、甚大な被害を受けた。その後に犯人グループから犯行声明があったというニュースだった。そのお陰で、船の出航時間が大幅に遅れた。そのニュースの映像を見ると、沢山のボロボロになった建造物と大量のガジェットの残骸があった。ガジェットの残骸があるということは十中八九、……いや、絶対にジェイル・スカリエツィが関わっている。

ノイさんは別れ際に、苦勞するけど、頑張れよ、と、言って何処かに行った。

実際に六課の隊舎を見ると、沢山の壊れた建造物の中でも、被害が大きい。何で、六課の被害がこんなに大きいのだろうか。

立ち入り禁止のテープが張られているが、局員の制服を着ているから、入れるだろう。でも、太刀を野球バットケースに入れて、担いでいるから、怪しまれないかな。

テープを超えて中に入って、誰か知っている人から詳しく教えてもらおうと探していると、ボロボロの隊舎の2階になのはさんがいた。

「なのはさん」

「……あれ？ シュ、シューマ？」

間があつたな。なのはさん、顔が少し暗い。何かあつたな。

「え？ 訓練は？」

「終わりました。それより、何があっただんですか？」

なのはさんの話によると、公開陳述会の日に襲撃されて、襲撃してきたのは、ナンバースと召喚師一味、ガジェットで、その後に主犯のジェイル・スカリエッティの犯行声明があった。六課のメンバーもケガ人が出たらしい。特に、手薄の六課を襲撃された時に防衛に当たった人の中で、ヴァイスさんとザフィーラさんが意識不明の重体。それにこれは驚いたことは、六課にいたヴィヴィオちゃんと、地上本部にいたギンガさんが攫われたらしい。ケガをした六課のメンバーは全員、聖王教会の病院に入院しているらしい。

ギンガさんは戦闘機人だから、分からなくもない。

後、ヴィヴィオちゃんを攫って、どうするつもりだ。でも、これで六課の被害が大きい理由が分かった。ジェイル・スカリエッティがヴィヴィオちゃんを攫うために、地上本部を襲撃する時より、戦力は少ないだろうが、それなりの戦力で六課を襲撃した。そして、ヴィヴィオちゃんを攫った。

あ、ヴィヴィオちゃんは何で、六課にいるんだ？ 六課で保護してたのか。

「シューマ、何か見違えたね。前より大人に見える」

「そうですか？ 別に身長は伸びてませんよ」

「うん。そうじゃなくて、雰囲気がだよ」

「……はあ」

言っていることが良く分からん。

「じゃ、これから病院に行つて、フェイト隊長がいるはずだから、フェイト隊長と一緒に聖王教会の騎士、カリムに会つて、今後の事で私とフェイト隊長、八神部隊長、シューマと一緒に話したいことがあるらしいの。後で私と八神部隊長も行くから」

「はい」

できれば聖王教会のカリムさんには会いたくないのな。はやてさんの上司だから、悪い人ではないんだろうけど、お互いの印象が悪だからな。

「ねえ、訓練はうまくいった？」

「ええ、まあ」

魔迅眼を完璧に使いこなせるぐらいには。

「そう。本当によかった」

なのはさんの視線が床にある顔の辺りが焦げているうさぎのぬいぐるみを見た。その後になのはさんは苦痛そうな表情を浮かべた。何か、話題を変えたほうがいいな。

「あの、なのはさん。FWメンバーもケガしたんですか？」

「……、あ、ティアナとキャロは無事で、エリオとスバルはケガはそこまで重症じゃないけど……」

「ギンガさんが攫われたから、元気がないんですか？」

「うん。それに眼の前で、ギンガを攫われたから……」

「……なるほど」

多分、抵抗はしんただけど、失敗したんだな。で、自分の無力を感じて落ち込んでいるのか。自分が役に立たなかったら、僕もそうだ。いや、誰だって、自分の無力を感じたら普通は落ち込むよな。そして、……なのはさん。あなたも。

でも、スバルさんもなのはさんも仲間が大丈夫だろ。あの時の僕とは、違ってさ。一樣、仲間である僕がここでカッコよくなのはさんに言えばいいのだが、僕じゃ何も思いつかない。それに年下の僕だと、様にならいしな。

「分かりました。じゃ、僕は病院に行つてきます」

「シューマ、その担いでいるケースの中に何が、入っているの？」

「デバイスですよ」

病院に行つて、通じるかどうかは分からないけど、フェイトさんに念話を試してみた。

（フェイトさん、聞こえますか？ シューマです）

（え？ ……シューマ？ 訓練は？）

（終わりました。なのはさんに、フェイトさんがこっちにいると聞いたので、そこで聖王教会のカリムさんに会つて、八神部隊長と隊長達、カリムさん、僕とで、話があるらしいです。それで、僕とフ

エイトさんで先にカリムさんに会いに行こうと

(分かった。今、何処にいるの?)

(中庭です)

(そう。じゃ、今から、行くから、待ってて)

(はい)

20話 襲撃の後（後書き）

携帯の方から、閲覧した方は、気付いているかもしれませんが、三
点リーダーが、……に、なっていると思います。これは……
を変換したら、……になっただけです。一樣、補足しておきます。
では、また次回。

21話 5分の集中、30分の制限（前書き）

分かっているのに、分からない振りして、悪化していく。悪化するのを分かっているのに。

21話 5分の集中、30分の制限

「お久しゅうございます。カリム・グラシア少将閣下殿」

ま、間違えたー！ カリムさんとの関係をなんとか良い方向に持っていくために、尊敬語で話そうとしたら、変な言葉になったよ。……どうしよう。カリムさん、八神さん、隊長達の空気が冷たくなっている。

「……あ、あの。シューマさん、別に無理に敬語を使わなくてもいいですよ。そ、そうですね、なのはさん？」

カリムさんが気を使ってくれた。

「そ、そうだよ。私達は仲間なんだから。ね、ねえ、八神部隊長」

「そ、そうや！ さ、さすが、エースオブエースは言うことが違うわー。な、フェイト執務官」

「え？ そ、そうだね。そうだよね」

やめてくれえー！ 無理して全員で僕に気を使うのはやめて！ その優しさが僕を傷つけるから。クソ、惨めな気持ちになってきた。

「そ、それよりカリムさん話して、何ですか？」

話題を変えよう。このままだと僕がさらに惨めな気持ちなる。

「シューマさん、訓練が終わったという事は、同時に魔迅眼と魔操眼は使いこなせるようになったのですか？」

「魔迅眼の方は大丈夫ですけど、魔操眼は5分ほど集中が必要です。後、魔操眼は30分の制限があります」

「そうですか。……訓練の時間を掛ければ、魔操眼の2つの条件はなくなるのですか？」

「前者の集中の方は訓練をしたらクリアできますが、後者の制限時間はできません」

「どうしてですか？」

「ノイさんから聞いたんですが、魔操眼は後天的に習得した物であり、ミットの魔法が一部が入っています。それが制限時間の原因で戦王の正統後継者はミットの魔法を30分以上、使い続けたら、リンカーコアが徐々に破壊されるみたいです」

「そうですか。では、訓練中にガジェットや戦闘機人、召喚師一味、チェン・トゥーノの襲撃がありませんでしたか？」

「いいえ、別に」

召喚師一味との接触はあったけど、襲撃じゃないからウソは付いてないよな。それにノイさんにそのことはしゃべらないように口止めされたからな。

「そうですか。それは良かった。では、ここからが本題です。今からシューマさん、あなたになのは隊長とフェイト隊長で模擬戦をや

ってもらいたいんです」

カリムさんのセリフを聞く限り、2人一緒に相手するみたいに聞こえる。もちろん1人ずつだよな。後、ちゃんとリミッターも付いて、2人とも本気でやらないよな。

「もちろん1人ずつですよね？」

「2人一緒やで」

何か良いことでもあったんですかはやてさん。笑顔ですね。……2人か、一人の男性が二人の女性を伴っているから、これは両手に花と言えるのだから。言えたとしてもちつとも嬉しくねー。

「……リミッターは付いてますよね？」

「私もフェイトちゃんも付けないよ」

なのはさん。あなたは今、何かつらいことがあって、落ち込んでいるはずじゃ。なのにどうして笑顔なんですか。

「……ちゃんと手加減しますよね？」

2人が相手にリミッターもないんだ。手加減してくれないと模擬戦じゃなくて、リンチに変わってしまう。

「私もなのはも本気でやるよ」

模擬戦ではなく、リンチになるらしい。そして、フェイトさん。あなたもどうして笑顔なんでしょう。僕をボコボコにするのがそん

なに楽しみなんですか。

「……冗談ですよね？」

そうだよ。模擬戦や2人いっぺんに相手することが本当でも、リミッターを外したり、本気でやることはウソかもしれない。季節外れのエイプリルブルだよ。たぶん。きっと。

「いいえ、冗談ではありませんよ」

止めを刺さないでくださいカリムさん。

「どうして模擬戦をやるんですか？」

「目的は二つあります。第一にどの程度、眼を使えるようになったか。第二にどのくらい強くなったかをみるためです」

「……ああ、そうですか」

場所は変わって、聖王教会の訓練場。バリアジャケットと戦神ノ太刀を装備している僕の目の前には、同じようにバリアジャケットとデバイスを装備しているやる気満々のフェイトさんとなのはさんがある。

そして、空中に四つのモニターがある。その一目にカリムさん、シャッハさん。二つ目に六課のメンバー、三つ目にクロノさん、額に青い印のある20代の美女、黄緑のロングヘヤーの男。四つ目に知らないおじさんが2人とおばあさんが1人。

こんなに大勢の人が見るのか。

『シューマさん、準備ができたと言ってください』

「分かりました」

まぶたを閉じて、自分が両目を魔迅眼と魔操眼に変わった姿を想像する事に集中しろ。

戦いの事に集中しろ。

敵を見る事に集中しろ。

魔法を速く発動する事に集中しろ。

魔力を自分の思い通り運用する事に集中しろ。

……発動した。

まぶたを開く。

ノイさんと訓練で両方の眼が発動した時と同じだ。自分の魔力が自在に動かせる感覚。

今、僕の右目の眼球は金色のベルカ式で、左目の眼球は黒いベルカ式になっているはず。

「……いいですよ」

『では、始めて下さい』

カリムさんの合図で模擬戦が始まった。

まずは体全体を魔力で強化する。

「まずは私から行くよ。シューマ」

そう言って、フェイトさんは黄色い魔力刃をオノの高速で僕の横に移動して、デバイスを振り下ろす。

それを太刀で受け止める。

フェイトさんの動きが見える。

「あれ？ フェイトさん、あなたもつと早かったですよね、僕の気の所為ですか？」

「シューマはもつと遅かったよね。私の気の所為かな？」

21話 5分の集中、30分の制限（後書き）

どうも火火火です。

今回の話にある額に青い印がある20代の美人はリンディさんですが、この額にある青い印って、何でしょうか？ 疑問に思います。では、また次回に。

22話 決戦前（前書き）

親しい人だからって、その人のことの全てを知らない方がいい。

22話 決戦前

『そこまで！』

カリムさんの合図で模擬戦が終わった。結果は僕の負けだなのはさんとフェイトさんにあんな秘密兵器があるとは思わなかった。確かにあの秘密兵器は、なのはさんやフェイトさんにピッタリだ。

「すごかったよ、シューマ。本当に強くなってるね。それにいつの間に飛行魔法も」

「そうだね。私もフェイト隊長も本気を出していなかったら、負けてたし、本気を出しても1対1なら、負けてたよ」

2人がバリアジャケットから制服に変わって、それぞれに感想を述べる。

んー、褒めているのは分かってるけど、負けた方の僕には、嫌みにしか聞こえない。まあ、僕がネガティブ奴だから、そういうふうに聞こえるんだろし、2人は本当に褒めてるだろう。

僕もジャケットから制服に変えて、戦神ノ太刀いくさがみのたちを鞘に仕舞う。

「いやー、完敗ですよ。まさか隊長達にあんな秘密兵器があるとは思いませんでした」

「アハハハハ、謙虚だね」

「そんなことないですよフェイトさん。2人のエロエロ悩殺バリアジャケットの前では、僕の特訓の紙切れ同然ですよ。アハハハハ」

「……えっ！？ い、今、何って？」

なんでなのはさんは、そんなに驚いてるんだ？ それにフェイトさんにモニターに映ってるみんなも。

「だから、2人のエロエロ悩殺バリアジャケットの前では、僕の特訓の紙切れ同然ですよ、って言ったんですよ。2人の悩殺ボディーと悩殺バリアジャケットで数乗以上威力です」

この後、酷い目に遭った。六課のみんなには、汚い物を見るような目で僕を見るし、カリムさんとシャツハさんには何故か怒られる。クロノさん、額に青い印のある20代の美女（クロノさんとフェイトさんの母親と、後でフェイトさんが言ってた。絶対に嘘だ）、黄緑のロングヘヤーのイケメン男（クロノさんと兄の友人で査察官らしいことをカリムさんが言ってた。）には呆れられた。知らないおじさん2人とおばあさん1人が誰なのかをなのはさんのに聞いたたら呆れられて話してくれた。その話を纏めると局ではかなり偉い人らしい。全然知らなかった。

数日後、六課の隊舎が壊れたのでその代わりに、巡洋艦アースラで過ごす事になった。自分の部屋は六課の時と同じようにエリオ君と一緒に。

今は仕事を一段落して、食堂で少し遅い昼飯を食べている。メニューはカレー。トッピングからあげでも追加すればよかった。

「シューマ、ここいいかな？」

なのはさんが僕の横で、バランスの良さそうな料理をトレイに乗せて、笑顔で聞いてくる。六課のみんなもそうだけど、なんで笑顔が普通にできるんだろ。

「別にいいですよ」

なのはさんが隣の席に座って、いただきます、と言って食べ始める。その後、2人で坦々と食べて、なのはさんが半分ほど食べると、箸を置いて、真剣な顔でしゃべり始めた。

「……私、シューマが入院してた病院でシューマを担当してた先生に君のことをフェイト隊長と聞いたら、どうして知りたいのか、って言われて、シューマのことを知って、辛いことがあったなら、助けになりたいです、って2人で答えたら、あいつは同情されるのが嫌いなんだよ。だから、あんたらみたいな人に話は気はないね、って言われた。その後、何とか食い下がって、話してもらったけどね……シューマは、こんなことは言われたくないかもしれないけど、私が言いたいから勝手に言うね。……辛かったよね。それと助けてあげなくて、ごめんね。本当にごめん」

「なんで、なのはさんが謝るんですか？ 意味がわかりませんよ」

本当に意味がわからん。後、覚えもないのに、辛かったとか、ごめんとか、言われるとイライラする。本人の前でそんなことは言えない。

「そのシューマが攫われた時に、助けられなかった。シューマのお兄さんは恩人で、弟のシューマと妹がいるって、知ってたのに……」

「気に病むことはないですよ。僕が攫われた時は、死んだ妹と一緒に死んだことになってたんですから」

「でも、やっぱり悔しくて、悲しいんだよ。シューマはそんなこと

は思われなくても」

確かに誰にでも僕のことをそういう風に思われたくないし、もちろん言われたくもない。あれは僕が弱虫だったから。理由はそれでいい。

「もういいですよ。それになのはさんの方は大丈夫なんですか？」

話を変えよう。これ以上、なんか言われるとキレるかもしれない。

「え？ 何が？」

「ヴィヴィオちゃんのことですよ。年下の僕があなたの心配なんてしても意味ないとは思いますがね」

「心配してくれてありがとう」

次の日に、アースラの会議室で、六課メンバー数人でこれからの方針について、決まったことは、レリックの捜査にジェイル・スカリエッティの一味が絡んでるので攫われたギンガさんとヴィヴィオちゃんの救出・搜索するために動くらしい。

さらに数日後、艦内にアラート音が響いた。

艦内モニターで、戦闘機人とゼスト・グランガイツ（こっちは別ルートで）が地上本部に向かっていている映像でその中には、ギンガさんがいた。多分、ジェイル・スカリエッティになにかされたのだろう。……スバルさんにはキツイな。

そして、僕の兄のクローンであるチェン・トゥーノ（こっちは戦闘機人とゼスト・グランガイツとも違うルートで）も本部に向かっている。

けど、これよりすごい物が目に入った。

モニター越しに見えるそれは、巨大飛行戦艦。

ジェイル・スカリエツィが高らかに声を上げて、嬉しいそうに言う。その巨大飛行戦艦名は聖王のゆりかごといゆらしい（他にも何か言ってたが、忘れた）。

ヘリにFWメンバー全員が乗り込み、アルトさんの操縦で、地上の降下ポイントに運んでもらった。ヘリのハッチが開いて、地上が見える。

「もう一度確認するよ。僕たちはミッドの中央の市街地方面、敵勢力の迎撃ラインに参加する。地上の部隊と協力して、向こうのめんどい敵、召喚師や戦闘機人、チェン・トゥーノを最初に叩いて、止めるのが僕たちの仕事」

「他の地上部隊は、AMF戦や戦闘機人戦がほとんどない」

「だから、私たちがトップで出て、とにかく向こうの戦力を削る」

「後は、迎撃ラインが止めてくれる、というわけですね」

「で、僕も戦闘機人戦がないけど、チェン・トゥーノと戦ったことがあるのは、この中では僕だけ。だから、そいつは僕が絶対に倒すから、後は頼んだよ」

「……前の自分なら絶対に倒すとか言わないな。僕がそう言つと、みんなが一斉に驚きながら、僕の方を見て、力強くうなづく。」

「でも何だか、……ちょっとだけエースの気分ですね」

エリオ君の言葉に微笑む、ティアナさん。

「じゃ、行くよ」

ヘリのハッチから全員が地上に降下する。

「僕はこれからチェン・トゥーノの所に、みんなは召喚師と戦闘機人を」

「『了解ッ！』」

これからそれぞれが色んな思いを心に秘めて、それぞれの戦場に向かう。みんな大変だと思うけど、無事に帰って欲しい。そんなことを思いながら、僕は飛んだ

22話 決戦前（後書き）

二か月振りの更新。多分、もう忘れらてる。
そして、毎回のようになぐたぐたな話になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5431r/>

魔法少女リリカルなのはStrikers another とある王家の子孫

2011年11月16日15時42分発行